

鶴見大学大学院文学研究科
文化財学博士論文

東洋古漆器における CT の活用
—伝世品を中心に—

資料編

渡邊裕香

平成 30 年度

鶴見大学大学院文学研究科
文化財学博士論文

東洋古漆器における CT の活用
－伝世品を中心に－

資料編

渡邊裕香

平成 30 年度

目次

1	黒漆秋草熨斗図沈金文箱（個人蔵）	1
2	黒漆薄に蝸螂蒔絵文箱（個人蔵）	3
3	黒漆夕顔扇蒔絵文箱（個人蔵）	5
4	黒漆花束蒔絵文箱（個人蔵）	7
5	黒漆薄に結文蒔絵文箱（個人蔵）	9
6	黒漆桐紋唐草蒔絵文箱（個人蔵）	11
7	黒漆立菊蒔絵文箱（個人蔵）	13
8	黒漆水に薄蒔絵文箱（個人蔵）	15
9	黒漆椿蒔絵文箱（個人蔵）	17
10	黒漆苜田雁千鳥蒔絵文箱（個人蔵）	19
11	黒漆十三輪花脚付盆（個人蔵）	21
12	内朱外黒漆輪花盆（個人蔵）	23
13	黒漆五輪花皿（個人蔵）	25
14	朱漆九稜花形盆（個人蔵）	27
15	屈輪文堆黒盆（個人蔵）	29
16	黒漆八宝文螺鈿盆（愛知県美術館蔵，木村定三コレクション M1386）	31
17	木目塗盆（愛知県美術館蔵，木村定三コレクション M1590）	33
18	牡丹図堆黒盆（個人蔵）	35
19	朱漆六弁花形天目台 A（個人蔵）	37
20	朱漆天目台（個人蔵）	39
21	黒漆二十四孝図螺鈿天目台（個人蔵）	41
22	牡丹図堆黒天目台（個人蔵）	43
23	朱漆金箔押六弁花形天目台（個人蔵）	45
24	黒漆天目台 A（個人蔵）	47
25	朱漆六弁花形天目台 B（個人蔵）	49
26	黒漆天目台 B（個人蔵）	51
27	黒漆天目台 C（個人蔵）	53
28	黒漆椿捻文螺鈿香合（愛知県美術館蔵，木村定三コレクション M1505）	55
29	黒漆五稜花形小皿（個人蔵）	57
30	黒漆桐紋澤瀉布袋葵蒔絵食籠（個人蔵）	59
31	花鳥蒔絵螺鈿書箆筒（個人蔵）	61

資 料 編

文箱	1~20
盆	21~36
天目台	37~54
香合（紙胎）	55~56
小皿（紙胎）	57~58
食籠	59~60
書簞笥	61~62



図 1-1 全形

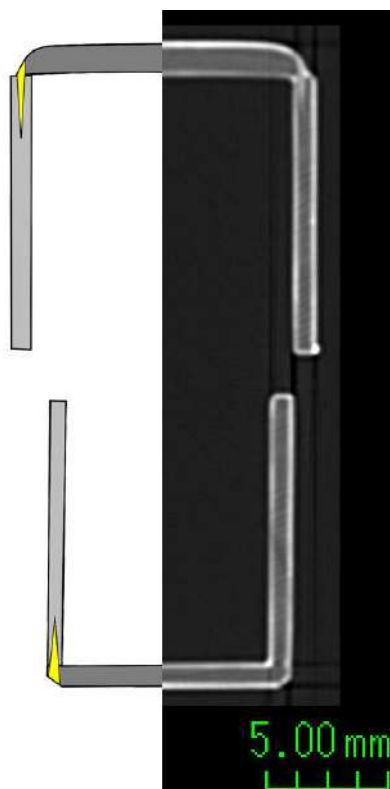


図 1-2 模式図と CT 画像

時代	日本 桃山時代（16世紀）
法量	縦 38.0 cm 高さ 5.8 cm 横 5.5 cm
員数	1合
所蔵者	個人蔵
附属品	外箱

黒漆塗りに沈金加飾を施した文箱。蓋表には薄や桔梗など秋草を描く。秋草は、紐と熨斗で束ねられている。緻密な線刻や点描で桔梗や葉脈をあらわす。蓋甲には幅の狭い塵居を設ける。紐金具は五三桐紋を打ち出す。

各部材には一枚板を使用する。各辺は釘を使用した三枚組接ぎで接合し、甲板と底板は四辺の隅に釘を打ち込み接合している。釘は木釘または竹釘とみられる。



図 1-3 沈金による加飾（蓋表の秋草）



図 1-4 紐金具

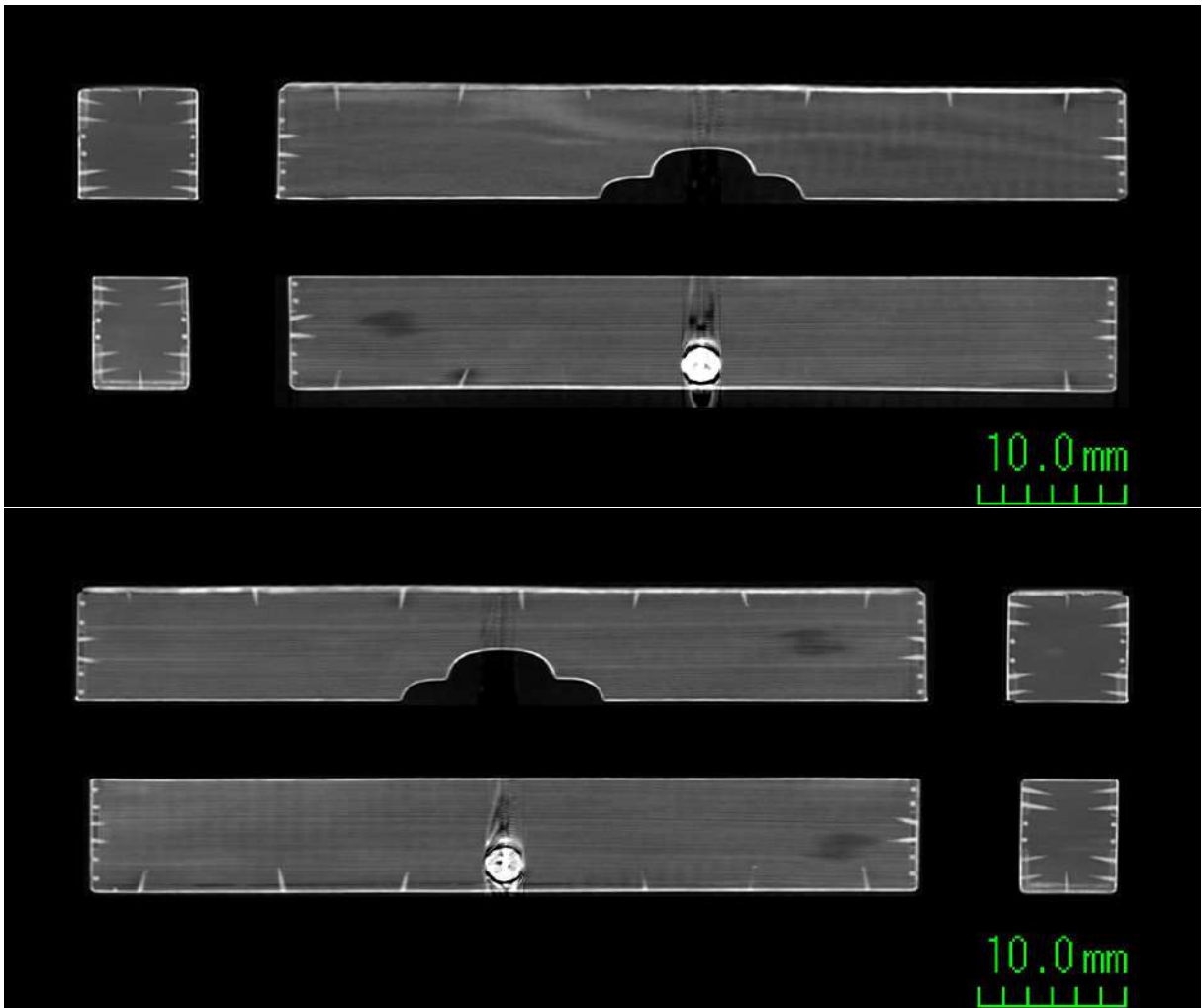


図 1-5 CT 側面断層画像（上図：意匠向かって上辺と左辺の側板，下図：下辺と右辺の側板）



図 2-1 全形

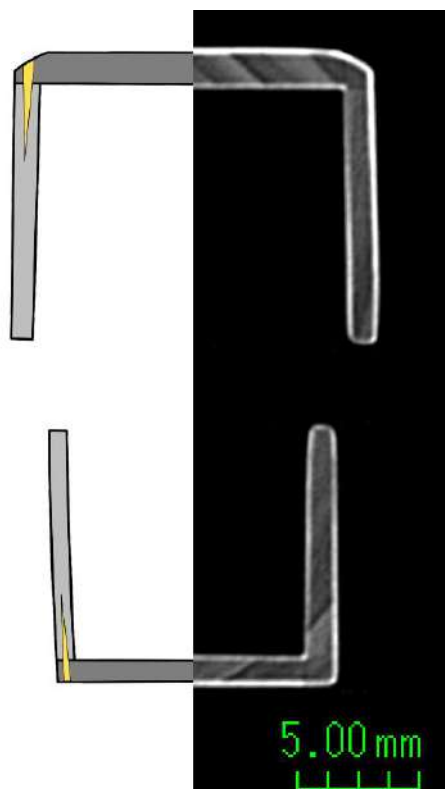


図 2-2 模式図と CT 画像

時代	日本 桃山時代（16世紀）
法量	縦 31.5 cm 高さ 5.2 cm 横 6.3 cm
員数	1合
所蔵者	個人蔵
附属品	外箱
<p>黒漆塗りに金平蒔絵で薄にとまる蠶螂を描いた文箱。描割で蠶螂の羽や葉の葉脈をあらわす。葉は、赤付けの絵梨子地と赤色漆を塗り分け、虫食いのような模様をつける。</p> <p>各部材には一枚板を使用する。各辺は釘を使用した三枚組接ぎで接合し、甲板と底板は四辺の隅に釘を打ち込み接合している。釘は木釘または竹釘とみられる。塵居を設けず、肩部を面取りしている。</p>	



図 2-3 平蒔絵と絵梨子地を併用して、葉の表裏や虫食いを表現する。



図 2-4 日月形の紐金具

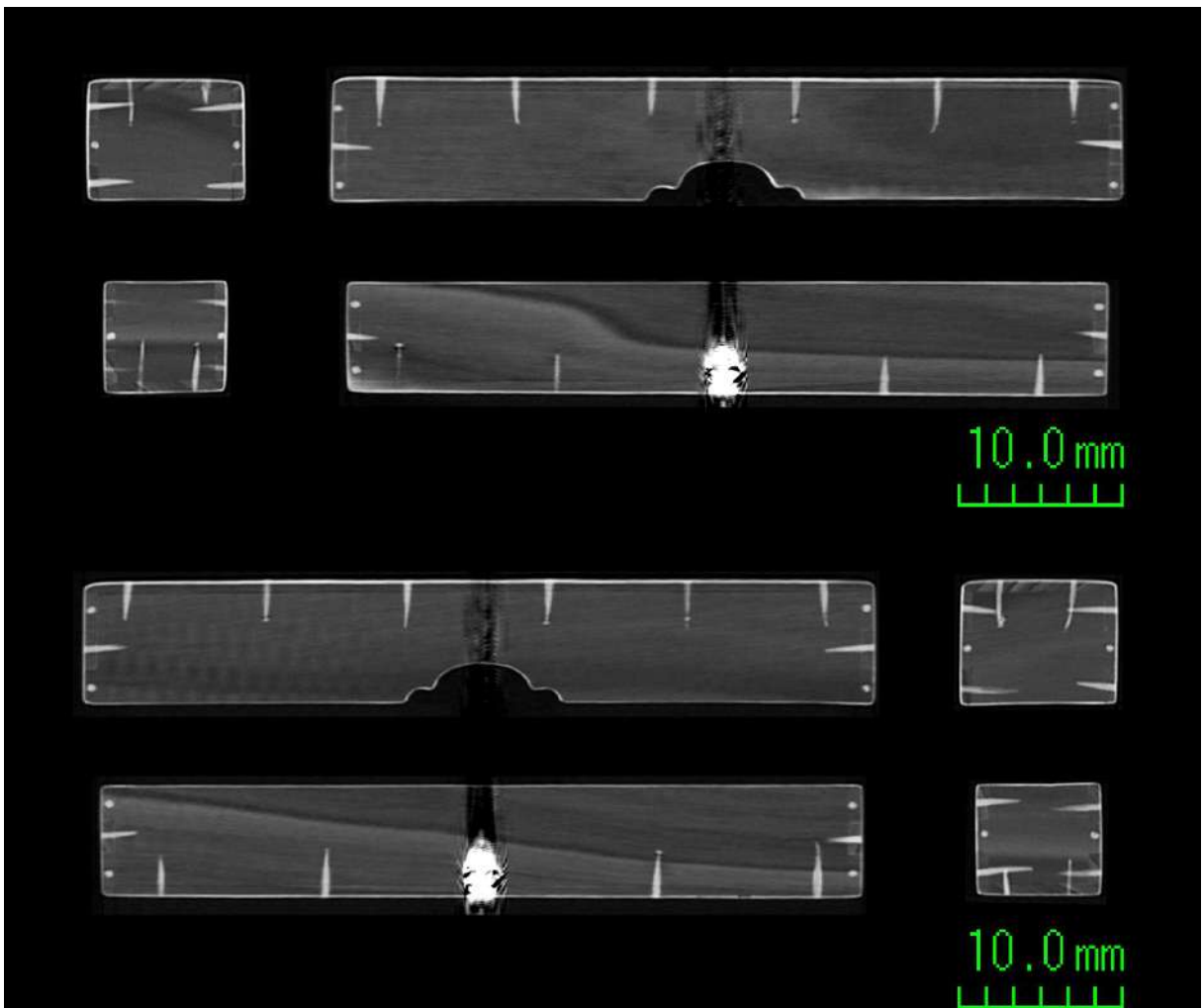


図 2-5 CT 側面断層画像（上図：意匠向かって上辺と左辺の側板，下図：下辺と右辺の側板）



図 3-1 全形

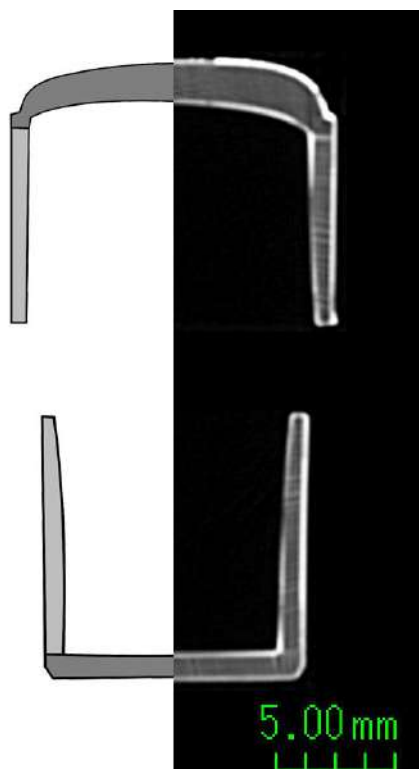


図 3-2 模式図と CT 画像

時代	日本 桃山時代（16－17 世紀）	
法量	縦 36.1 cm	高さ 6.0 cm 横 5.8 cm
員数	1 合	
所蔵者	個人蔵	
附属品	外箱	
<p>黒漆塗りに金平蒔絵で夕顔と扇地紙を描いた文箱。蓋甲には 3 枚の扇地紙が等間隔に配され、それぞれに燕子花、梅の樹、薄を描き、四季をあらわす。金平蒔絵と絵梨子地を蒔き分け、精緻な針描と付描線で、蔓や葉脈を描く。</p> <p>各部材を一枚板で成形する。四辺の側板は、板を直角にあわせて内側から三角柱の隅木をあてる。塵居は甲板の周縁に削り出す。釘は用いていない。</p>		



図 3-3 扇地紙に描かれた燕子花



図 3-4 マクロ写真 (夕顔の葉と葉脈)

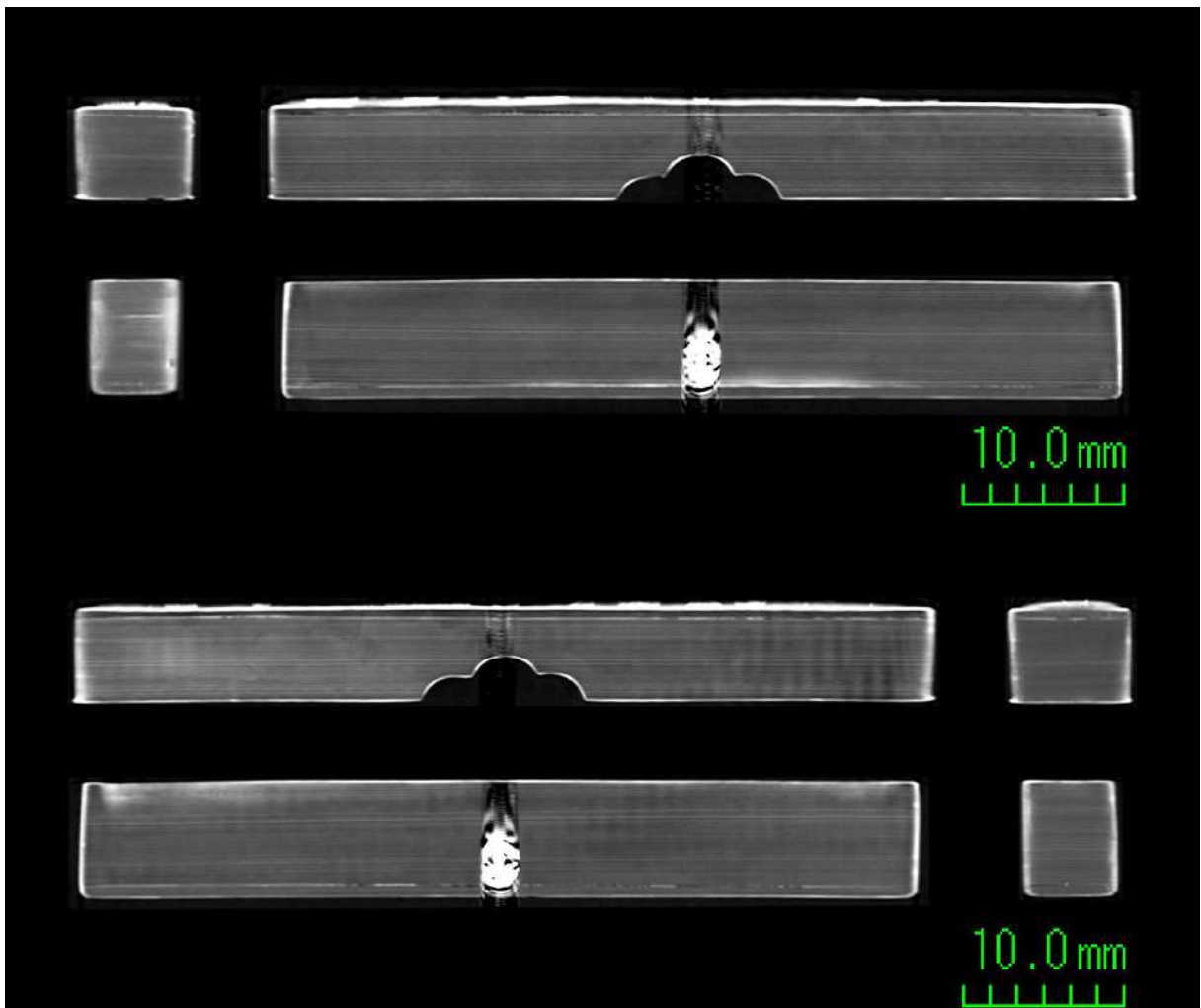


図 3-5 CT 側面断層画像 (上図：意匠向かって上辺と左辺の側板, 下図：下辺と右辺の側板)



図 4-1 全形

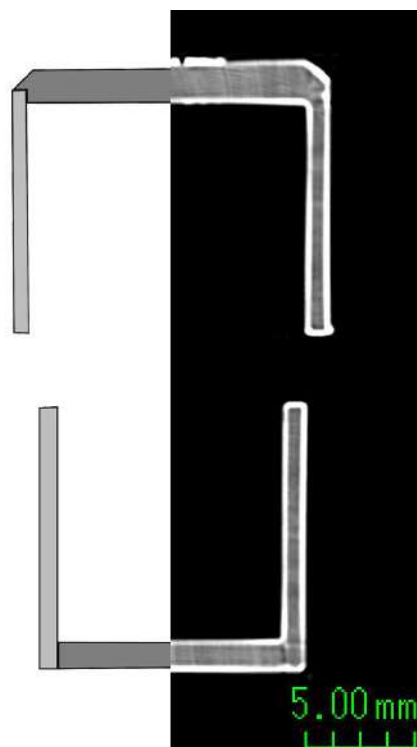


図 4-2 模式図と CT 画像

時代	日本 桃山－江戸時代（17世紀）
法量	縦 35.6 cm 高さ 6.1 cm 横 6.4 cm
員数	1合
所蔵者	個人蔵
附属品	外箱
<p>黒漆塗りに金平蒔絵で菊花の花束を描いた文箱。菊花や薄を金平蒔絵と絵梨子地で描き分ける。葉脈や紐の重なりを精緻な針描であらわす。</p> <p>蓋裏には銘文が記され、奈良にあった造り酒屋「讃岐屋兵介」が「松月讃貞信女」のために當麻寺念仏院に寄進したとみられる。</p> <p>各部材は一枚板で成形する。各辺を直角に接合する。甲板は、裏面の四辺に溝を彫り、側板上部の木口と接合する。</p>	



称讚浄土箱 當麻寺南別所 寄進壇乙
 為松月讚貞信女菩薩 南都中院町讚岐屋兵介叙親
 念仏院



図 4-4 日月形の紐金具

図 4-3 日月形の紐金具

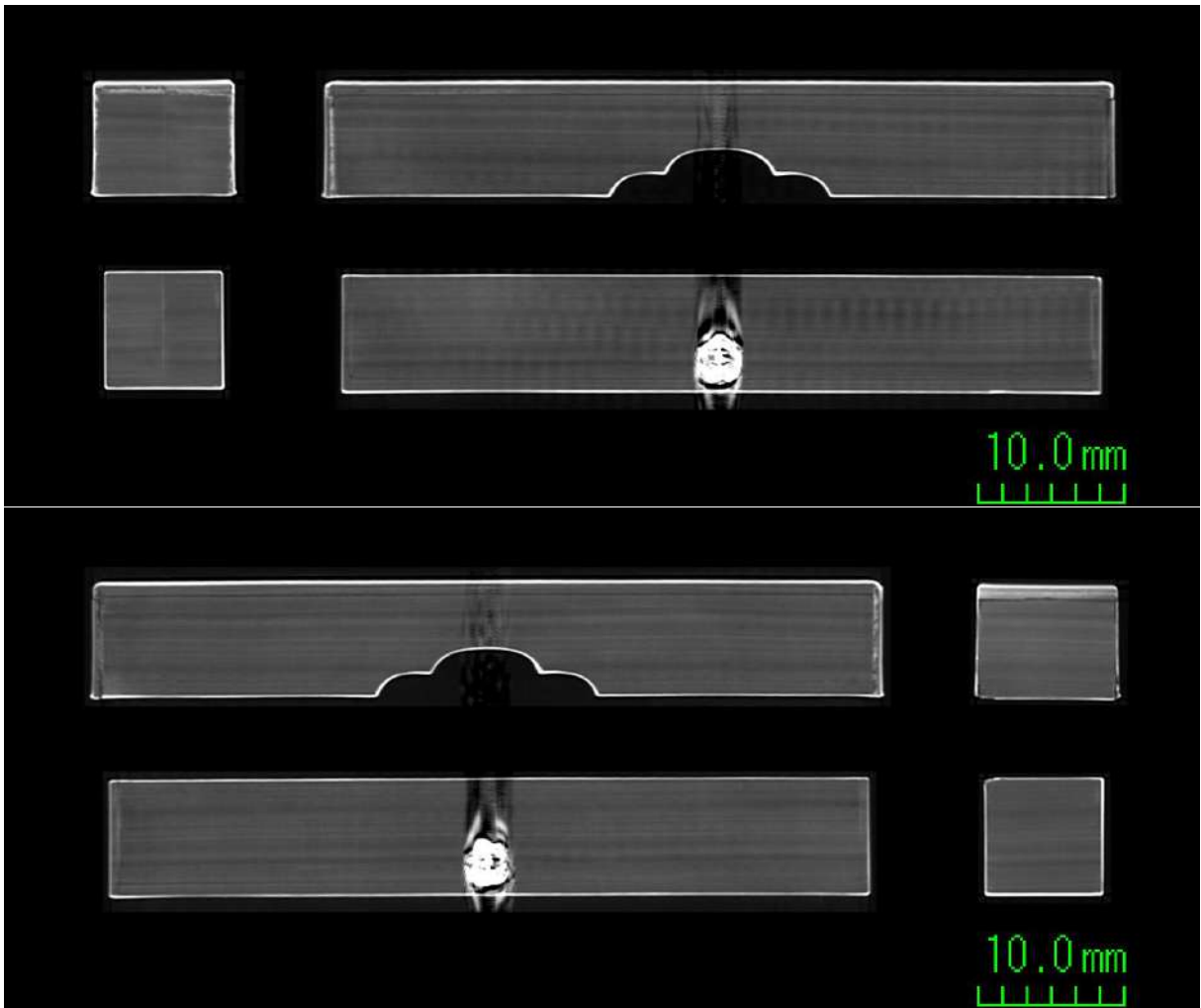


図 4-5 CT 側面断層画像（上図：意匠向かって上辺と左辺の側板，下図：下辺と右辺の側板）



図 5-1 全形

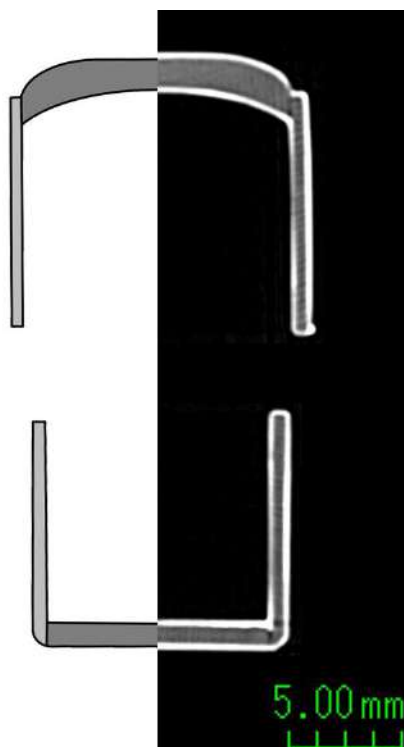


図 5-2 模式図と CT 画像

時代	日本 桃山－江戸時代（17世紀）
法量	縦 34.8 cm 高さ 5.9 cm 横 5.8 cm
員数	1合
所蔵者	個人蔵
附属品	外箱
<p>黒漆地に金蒔絵で結び文をつけた薄を描く。結び文には、絵梨子地に平蒔絵で秋草を描く。葉には虫食い表現があり、緻密な針描で葉脈をあらわす。薄は左右長辺の蓋鬘まで葉を伸ばす。</p> <p>各部材は一枚板で成形する。各辺は、二辺の板を直角にあわせて、内側から隅木をあてる。甲板は、四辺の蓋側板で成形された木枠の内側に押し込む形で接合している。底板も同様に、入底と呼ばれる。</p>	



図 5-3 マクロ写真（結び文部分）

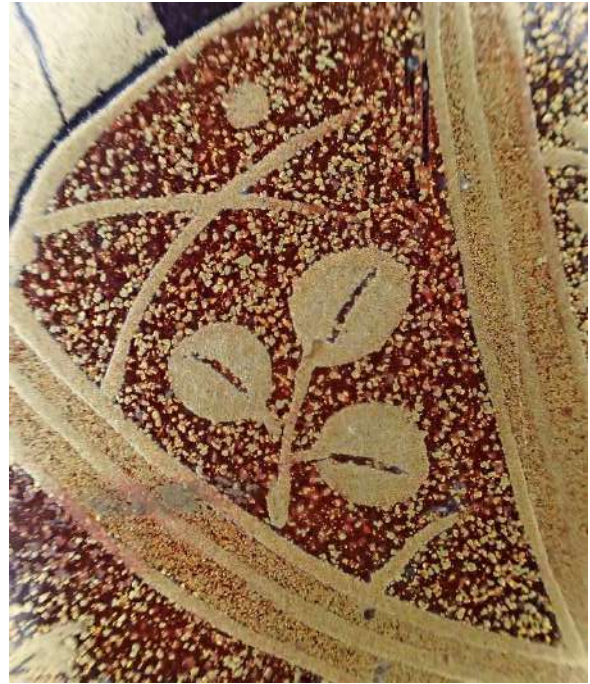


図 5-4 マクロ写真（蒔絵部分）

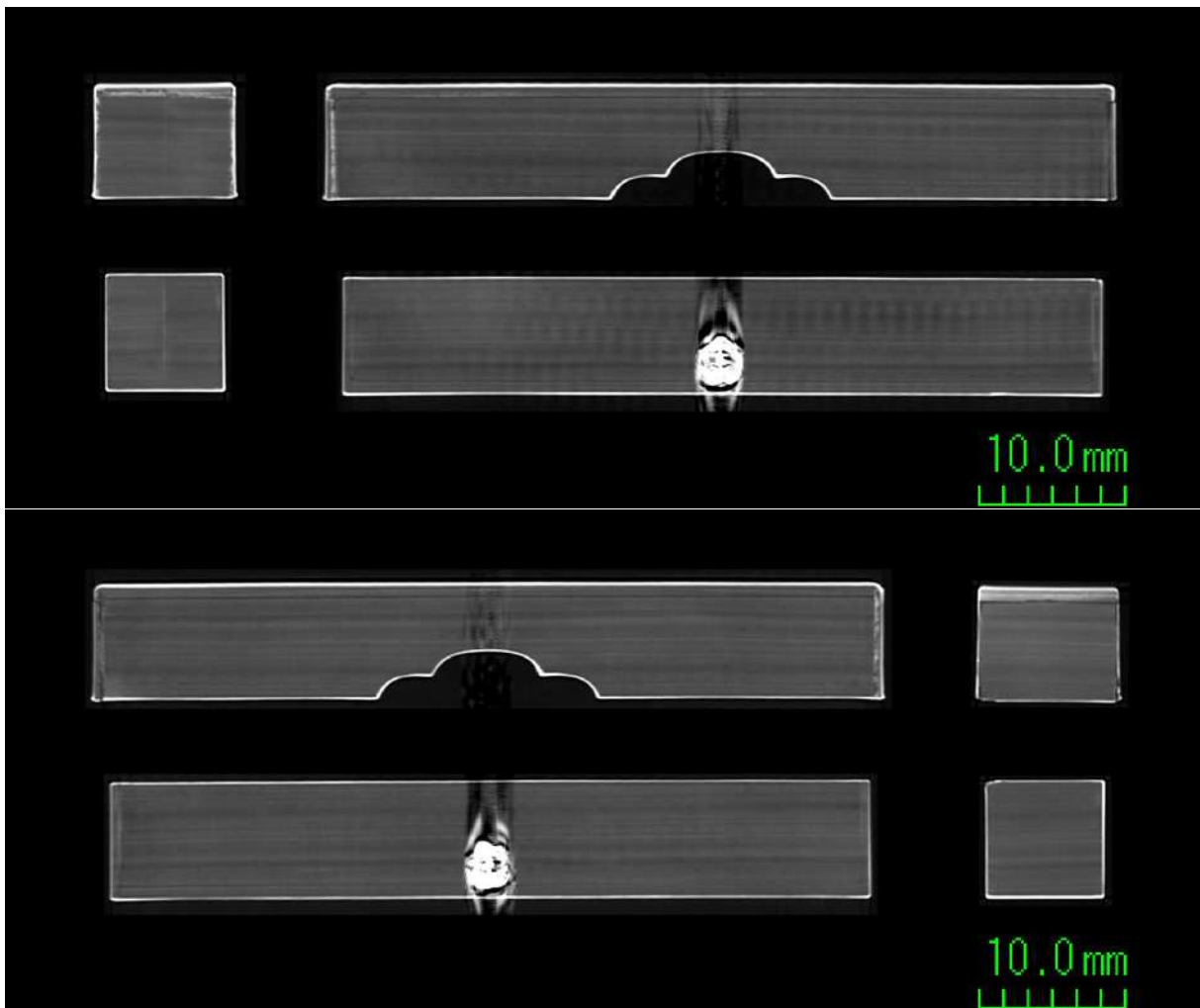


図 5-5 CT 側面断層画像（上図：意匠向かって上辺と左辺の側板，下図：下辺と右辺の側板）



図 6-1 全形

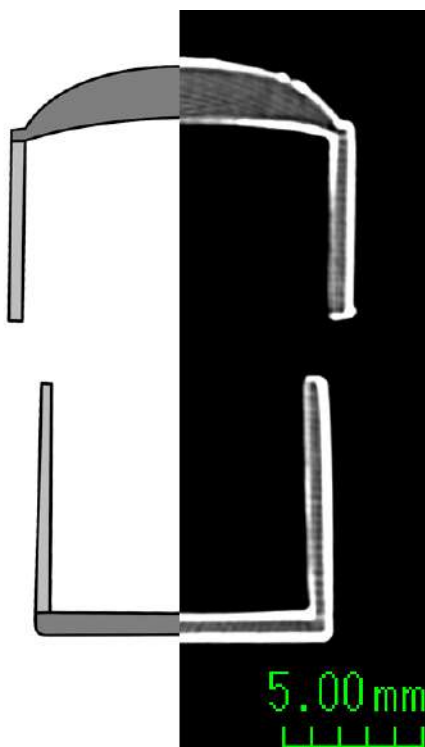


図 6-2 模式図と CT 画像

時代	日本 桃山－江戸時代（17世紀）
法量	縦 22.9 cm 高さ 5.2 cm 横 5.5 cm
員数	1合
所蔵者	個人蔵
附属品	外箱
<p>桐唐草に五七桐紋を配したやや小振りの文箱。中央の桐紋から左右に図様が展開する。金平蒔絵と絵梨子地を蒔き分け、付描と針描で葉脈をあらわす。</p> <p>各部材は一枚板で成形する。各辺は、二辺の板を直角にあわせて、内側から隅木をあてる。甲板は、四辺に塵居を削り出し、側板と接着する。底板は側板木口と接合する。</p>	



図 6-3 中央に配置された桐紋は長辺を天地として左右へと唐草を伸ばす

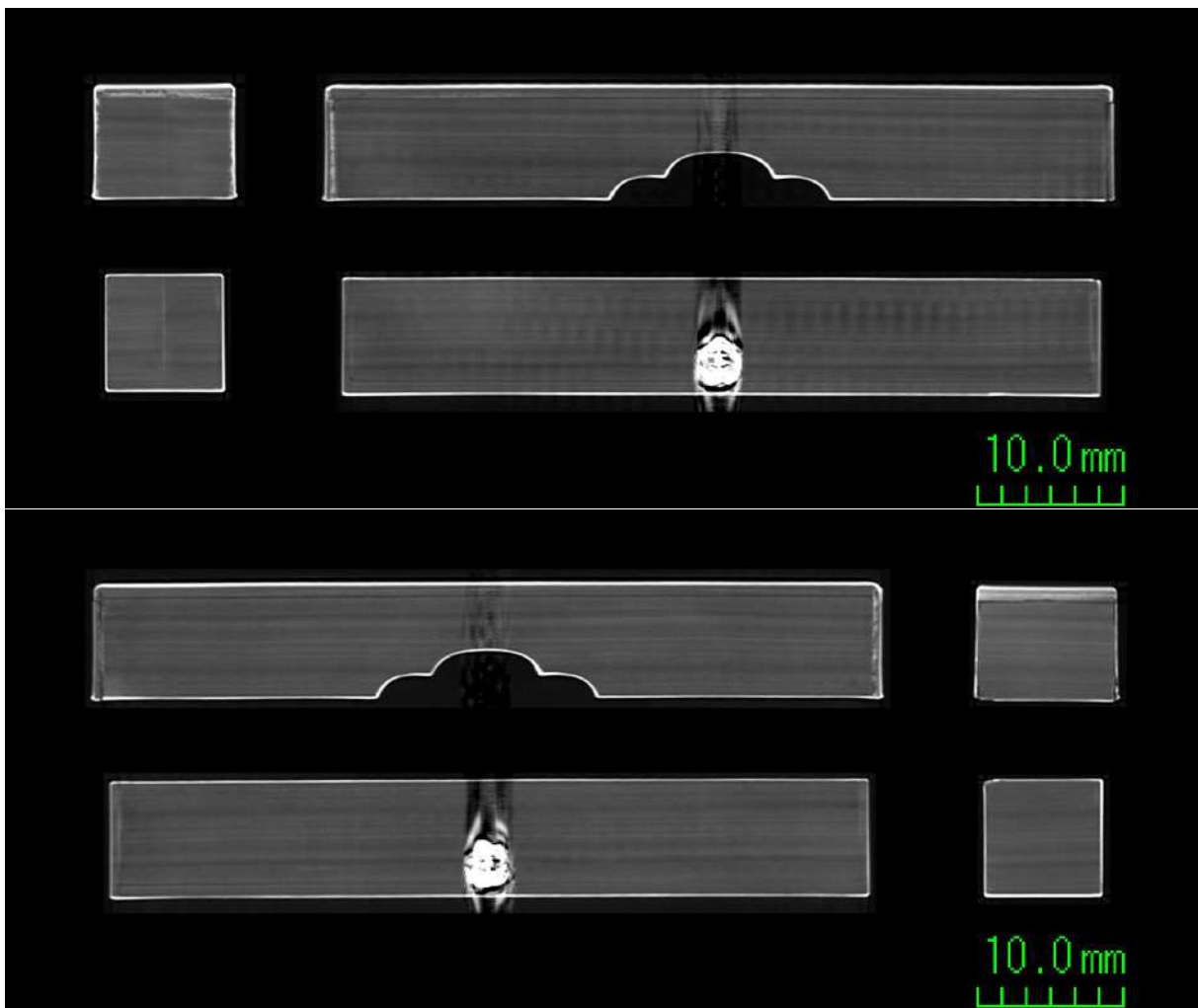


図 6-4 CT 側面断層画像（上図：意匠向かって上辺と左辺の側板，下図：下辺と右辺の側板）



図 7-1 全形

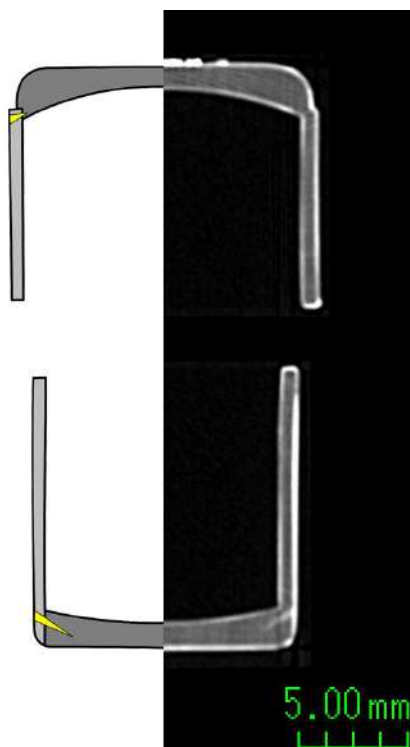


図 7-2 模式図と CT 画像

時代	日本 江戸時代（17世紀）
法量	縦 37.3 cm 高さ 6.7 cm 横 6.0 cm
員数	1合
所蔵者	個人蔵
附属品	外箱
<p>黒漆地に金蒔絵で立菊を描いた文箱。肉持ちのある付描で輪郭を鮮明に描く。黒漆地に金平蒔絵と絵梨子地を蒔き分けて意匠をあらわす。菊花は裏菊や葉が翻る様子も描かれ、奥行のある構図となっている。</p> <p>各部材は一枚板から成形されている。身と蓋の内側がアーチ状であり、軸物を入れていた可能性がある。甲板と底板の接合には、木釘または竹釘を用いる。</p>	



図 7-3 立菊の蒔絵（肉持ちのある付描で輪郭を鮮明に描く）

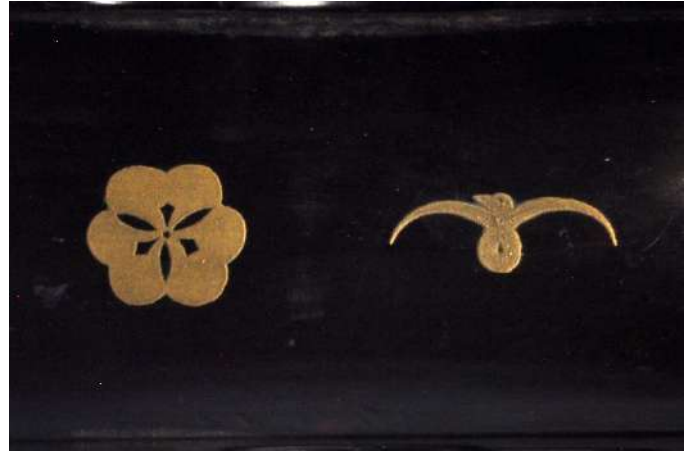


図 7-4 蓋裏には所有者をあらわしているとみられる結び雁金紋と酢漿草紋を金平蒔絵であらわす

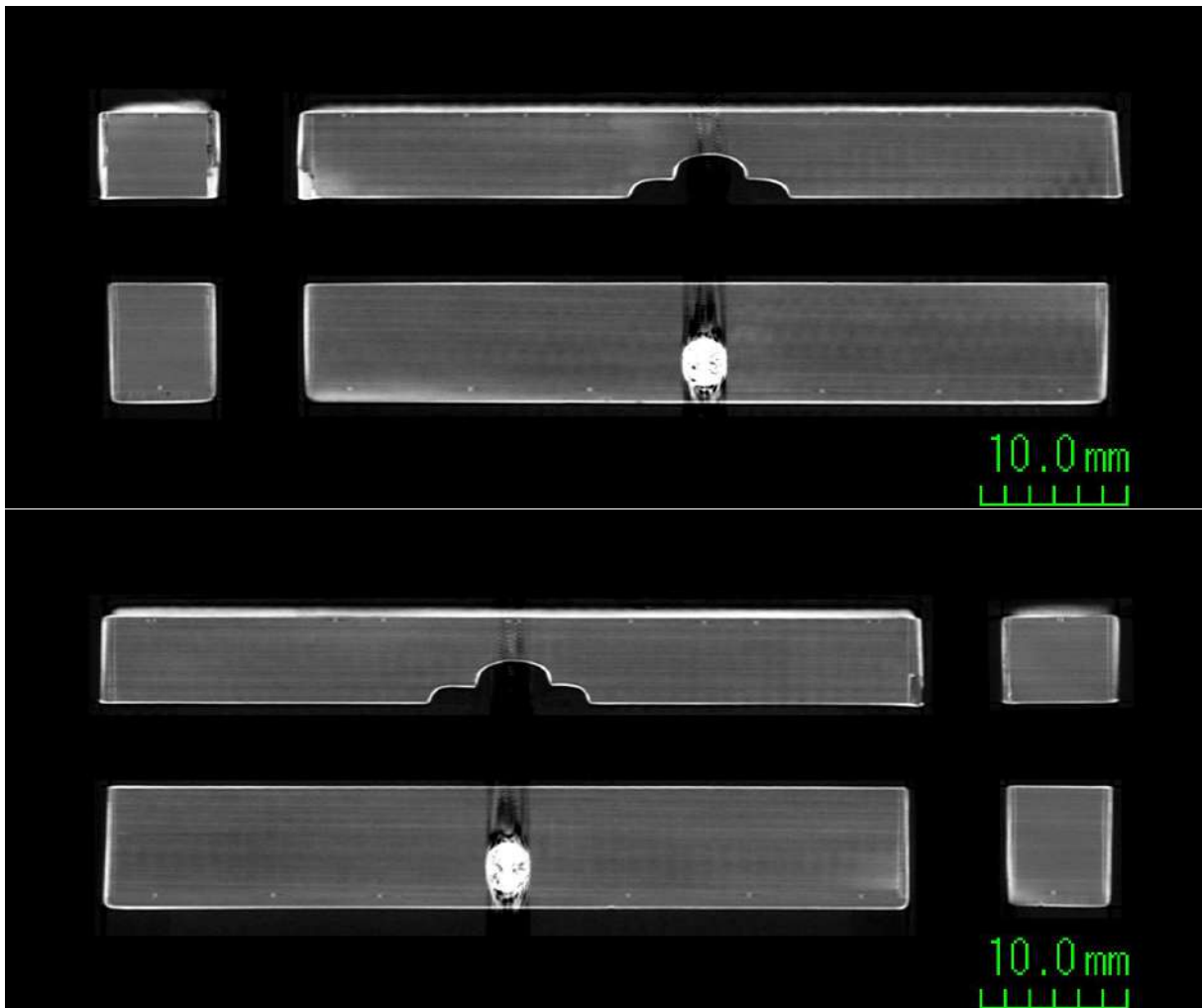


図 7-5 CT 側面断層画像（上図：意匠向かって上辺と左辺の側板，下図：下辺と右辺の側板）



図 8-1 全形

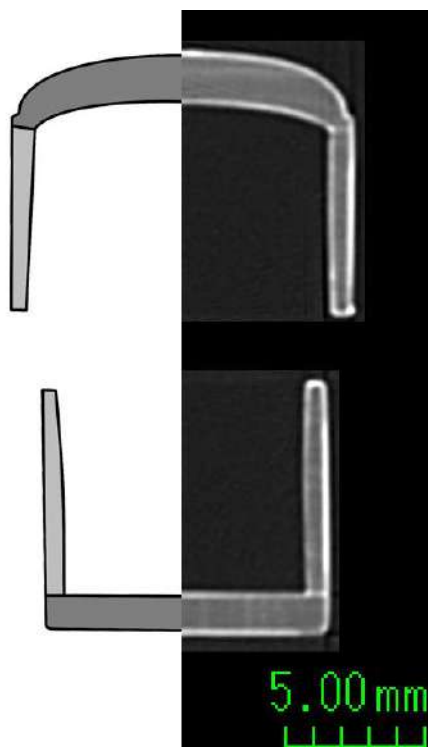


図 8-2 模式図と CT 画像

時代	日本 江戸時代（17世紀）
法量	縦 34.2 cm 高さ 5.3 cm 横 5.2 cm
員数	1合
所蔵者	個人蔵
附属品	外箱
<p>黒漆地に金蒔絵で流水に伸びる薄を描いた文箱。2本の茎が絡み合うように伸びる。葉は蓋甲の縁まで一杯に伸ばす。紐金具は金銅製とみられる。</p> <p>各部材は一枚板から成形されている。甲板の四辺に塵居を削り出している。側板相互の接合は、長辺の側板で短辺を挟む様に接合している。</p>	



図 8-3 蓋表の意匠
(2本の薄が絡み合うように伸びる)



図 8-4 菊花形座金の紐金具

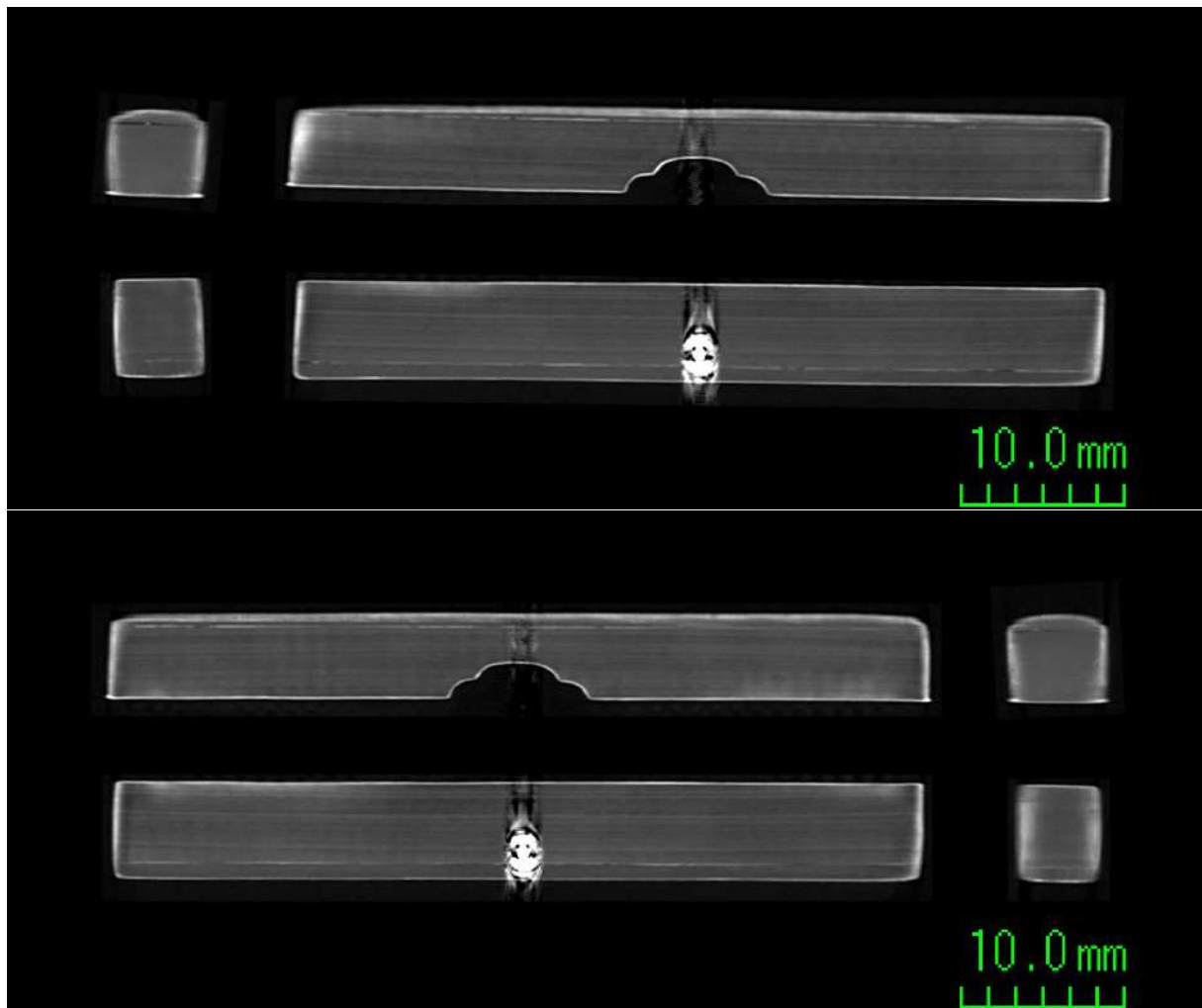


図 8-5 CT 側面断層画像 (上図：意匠向かって上辺と左辺の側板，下図：下辺と右辺の側板)



図 9-1 全形

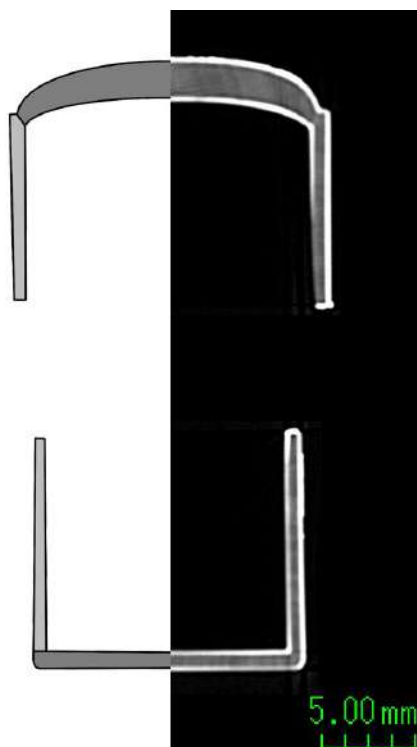


図 9-2 模式図と CT 画像

時代	日本 江戸時代（17-18 世紀）	
法量	縦 37.4 cm	高さ 6.9 cm 横 7.3 cm
員数	1 合	
所蔵者	個人蔵	
附属品	外箱	
<p>黒漆地に椿の立木を描いた文箱。蓋短辺から幹を伸ばし、左右の側板に達する。平蒔絵は密に蒔き、肉持ちのある付描線で花芯を描く。</p> <p>各部材は一枚板から成形されている。蓋内側はアーチ状に成形されている。側板相互の接合は、二辺を直角に合わせた後、内側から隅木を当てて布着せを施す。</p>		



図 9-3 蓋表の意匠
(平蒔絵は金粉を密に蒔く)



図 9-4 五三桐紋を彫り込んだ座金

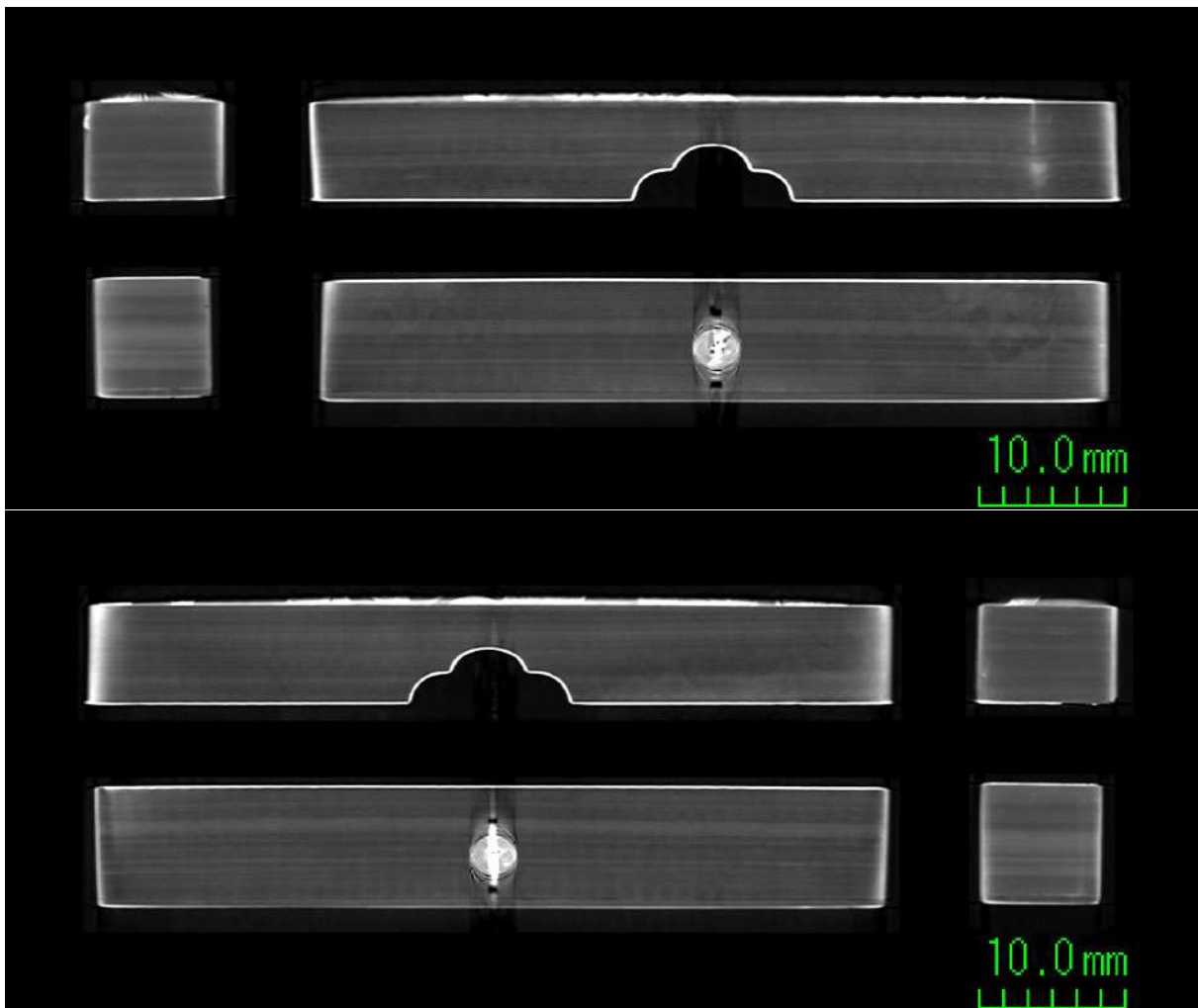


図 9-5 CT 側面断層画像 (上図：意匠向かって上辺と左辺の側板，下図：下辺と右辺の側板)



図 10-1 全形

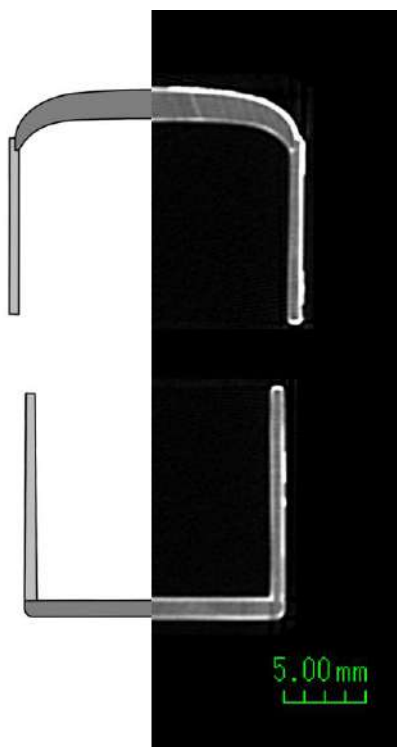


図 10-2 模式図と CT 画像

時代	日本 江戸時代（17-18 世紀）
法量	縦 38.5 cm 高さ 7.4 cm 横 7.9 cm
員数	1 合
所蔵者	個人蔵
附属品	外箱
<p>蒟田の上を飛び交う千鳥の群れと雁を描いた蒔絵の文箱。蒟田は、梨子地粉の大小や密度を蒔き分けてあらかわす。3羽の雁は、量感のある翼を絵梨子地と付描線であらかわす。飛び交う千鳥は意匠化している。</p> <p>各部材は一枚板から成形されている。四辺相互の接合は、二辺を直角にあわせて内側から隅木を当てる方法である。</p>	



図 10-3 蓋表の意匠
(量感のある翼を絵梨子地と付描であらわす)



図 10-4 五三桐紋を彫り込んだ座金

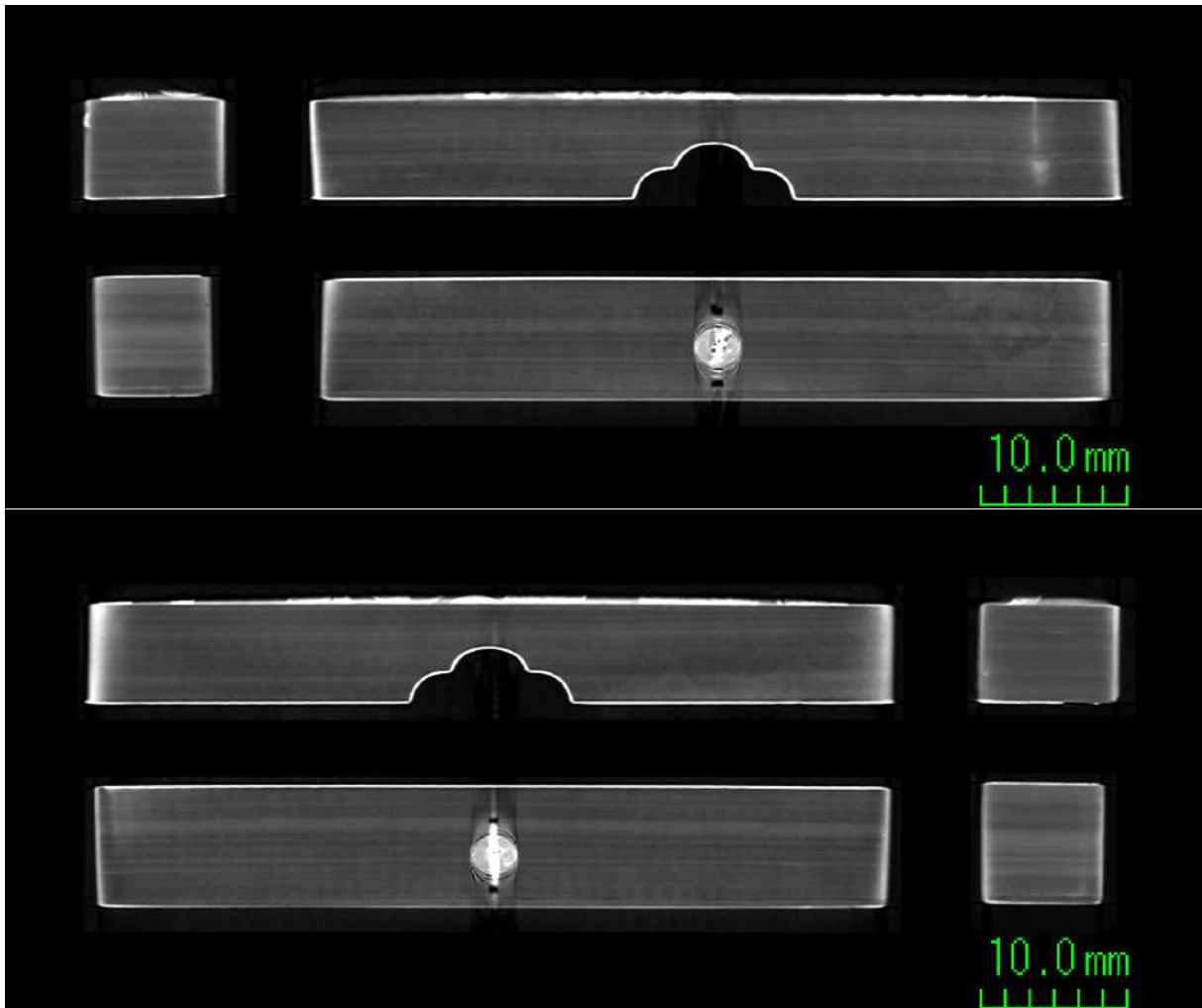


図 10-5 CT 側面断層画像 (上図：意匠向かって上辺と左辺の側板, 下図：下辺と右辺の側板)



図 11-1 全形



図 11-2 高台内の朱漆銘「鵬」



図 11-3 側面写真

時代	中国 南宋時代 (12-13 世紀)	法量	直径	21.7 cm
員数	1 枚		高台径	9.7 cm
附属品	外箱		高さ	5.7 cm
		所蔵者	個人蔵	

総体黒漆塗りの無文の盆。丸みを帯びた鍔に真鍮製の覆輪を巡らす。高い円筒形の高台内には、「鵬」の朱漆銘がある。鍔表には後補とみられる朱漆が塗布されている。

見込み部分は円形木胎の板で成形し、中央にコンパス状工具の針孔がみられる。鍔は巻胎で成形し、縁を十三輪花形に削り出す。

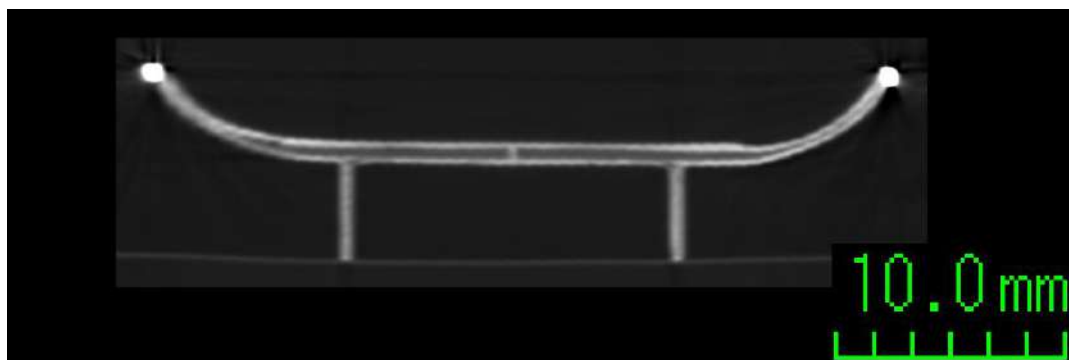
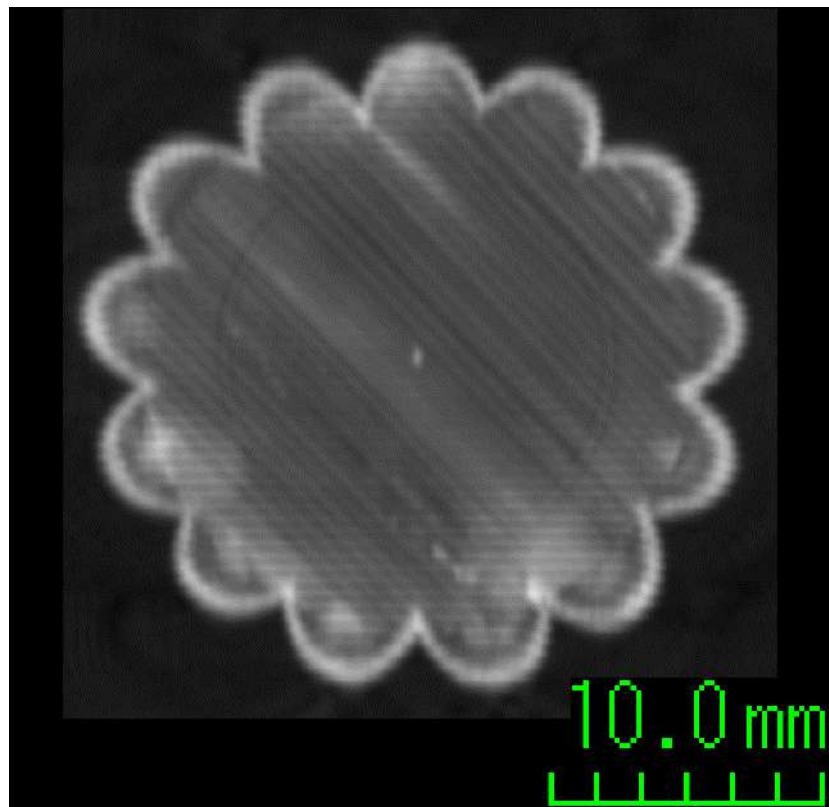


図 11-4 CT 画像（上図：見込みの横断面，下図：側面断層画像）

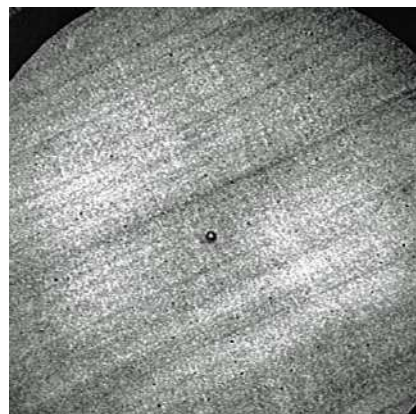


図 11-5 X 線透過画像（左図：見込みから鏝縁，右図：見込み中央のコンパス痕）



図 12-1 全形



図 12-2 底面



図 12-3 側面

時代	中国 南宋時代（12-13世紀）	法量	直径	18.0 cm
員数	1枚		高台径	8.7 cm
			高さ	2.8 cm
附属品	外箱	所蔵者	個人蔵	
<p>内朱外黒漆の無文の盆。底部に広い平滑面を設け、角度をつけて鐔縁にむかって立ち上がる。鐔縁は、外反りし、金銅製とみられる覆輪を巡らす。</p> <p>見込み部分はコンパスの痕跡がみられる円形木胎の板で成形し、鐔を巻胎で成形する。巻胎部分は広く設けられ、見込みの板の直径は高台の直径に近似している。</p>				

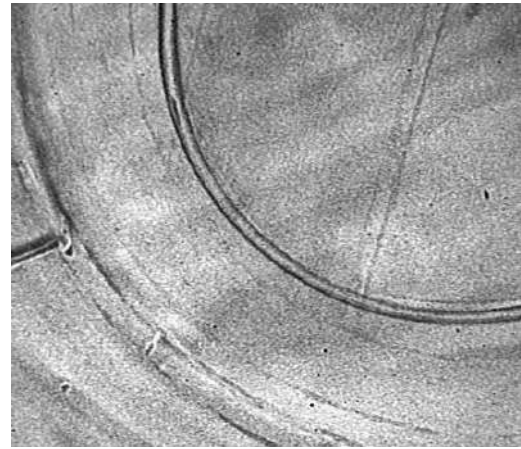
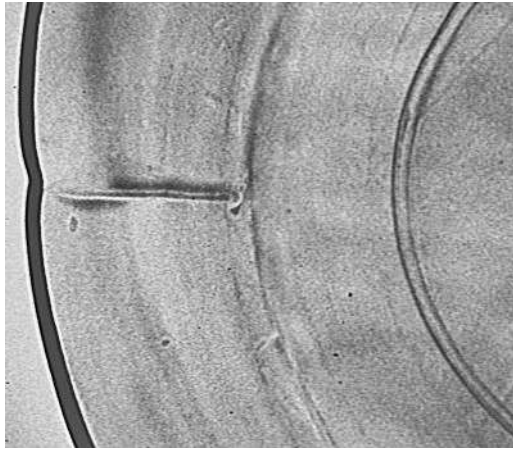
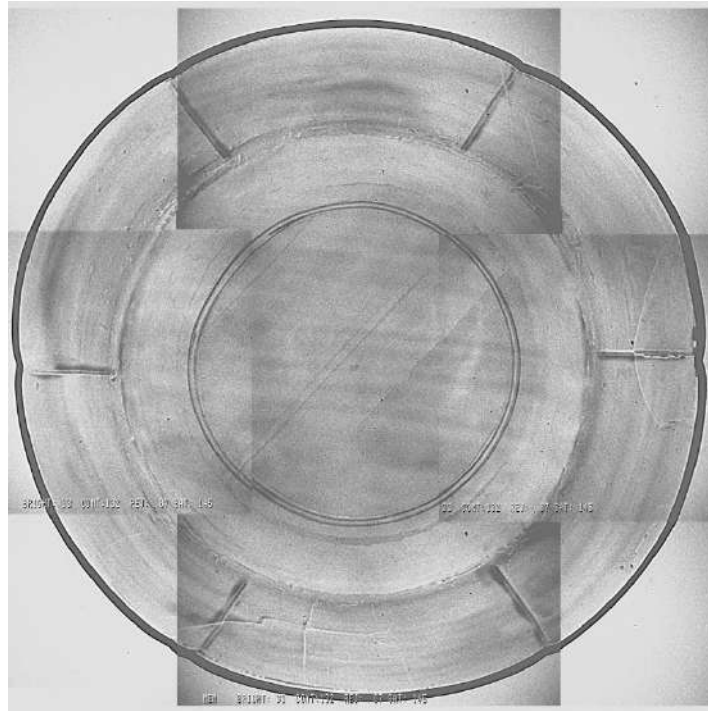


図 12-4 X線透過画像（上図：全体，下図：部分画像）
部分画像からは巻胎のテープ材が鋳の部分に巻かれている様子があらわれている。



図 12-5 マクロ写真（左図：鋳表の覆輪部分，右図：高台部分）



図 13-1 全形



図 13-2 底面



図 13-3 側面

時代	中国 宋一元時代（13-14世紀）	法量	直径	12.9 cm
員数	5枚		高台径	8.7 cm
			高さ	1.9 cm
附属品	外箱	所蔵者	個人蔵	

総体黒漆塗りの無文の盆。六輪花形の鏝表は、稜線を錆漆や糸のような細長い材質で鮮明につける。現在、5枚一組で伝世し、5枚とも高台内に「松」の朱漆銘がある。

見込み部分はコンパスのような針孔の痕跡がみられる円形木胎の板で成形し、鏝を巻胎で成形する。高台は木質の籬のような材質を巻いて成形する。

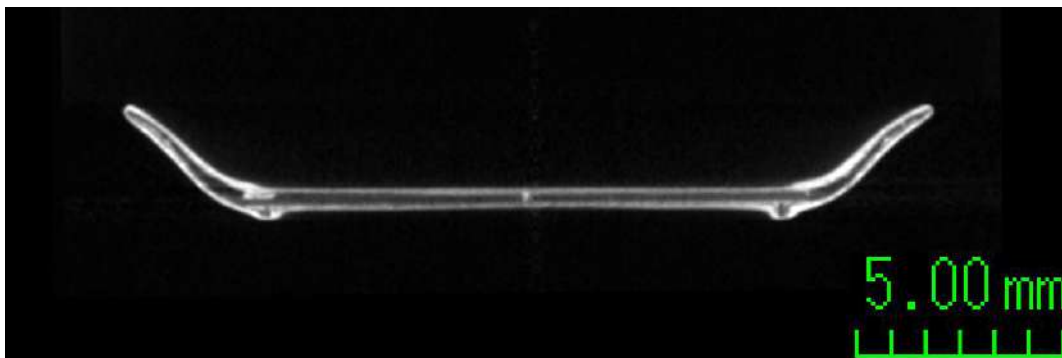
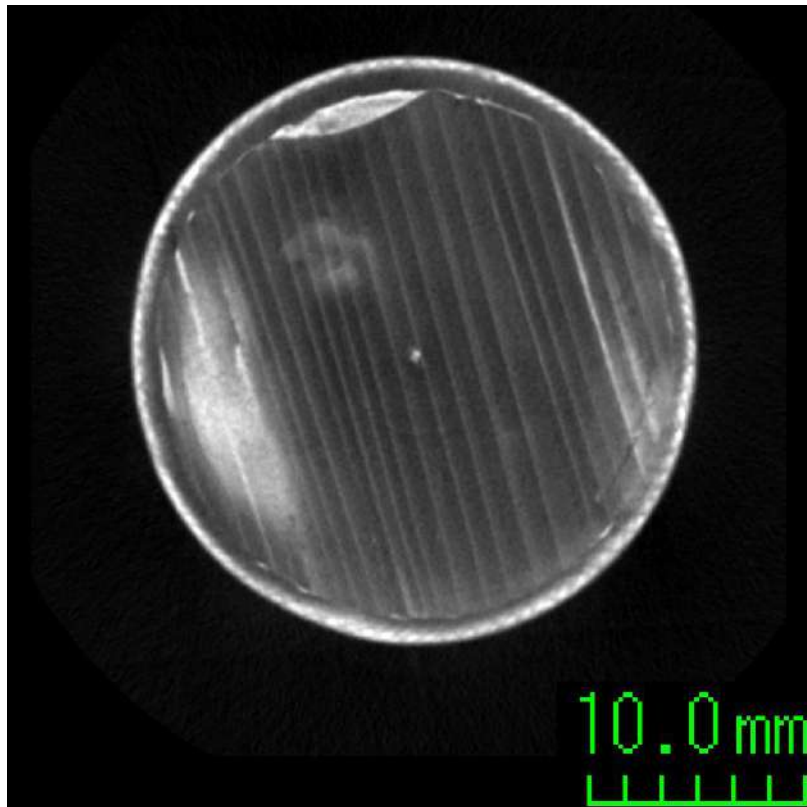


図 13-4 CT 画像（上図：見込みの横断面，下図：側面断層画像）

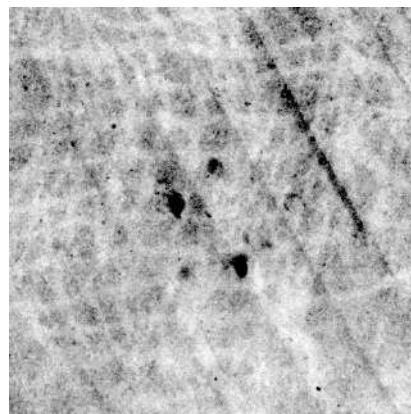


図 13-5 X 線透過画像（左図：見込みから鐳縁，右図：見込み中央のコンパス痕）



図 14-1 全形



図 14-2 底面



図 14-3 側面

時代	中国 宋一元時代（13-14世紀）	法量	直径	16.9 cm
員数	1枚		高台径	10.7 cm
			高さ	3.4 cm
附属品	外箱	所蔵者	個人蔵	

総体朱漆塗りの無文の盆。見込みと高台内のみ黒漆塗りである。鏝縁が水平に張り出し、縁を玉縁に成形する。塗膜破損個所の観察から、玉縁は下地などを盛り上げている。

見込み部分はコンパスのような針孔の痕跡がみられる円形の柁目板で成形し、鏝を巻胎で成形する。水平部分は別途製作した巻胎構造を接合しているとみられる。

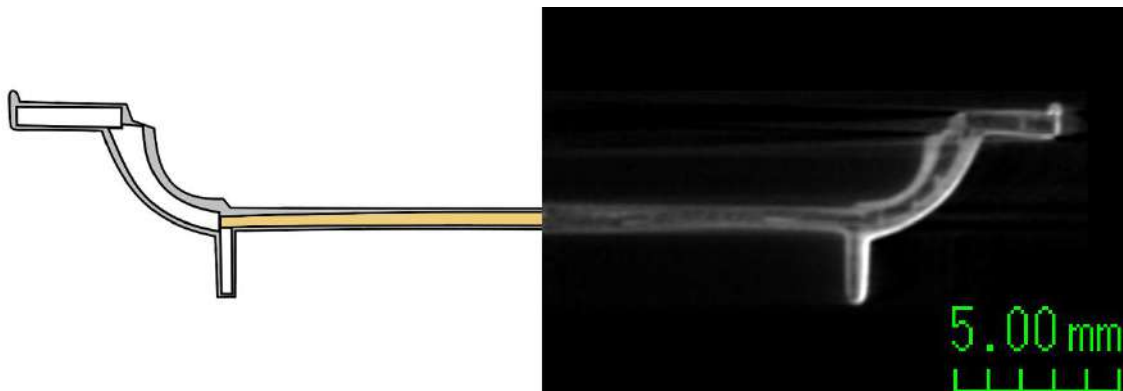
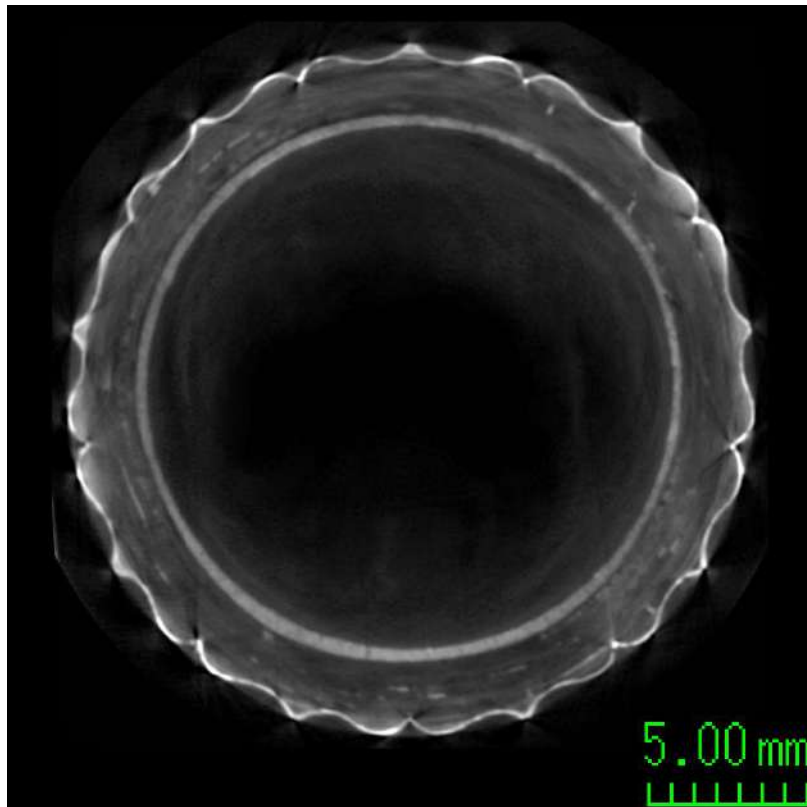


図 14-4 CT 画像と模式図（上図：CT 画像，下図：左は模式図．右は CT 側面断層画像）



図 14-5 X 線透過画像（鏢縁の水平部分）



図 14-6 実体顕微鏡撮影（玉縁部分，×10）



図 15-1 全形

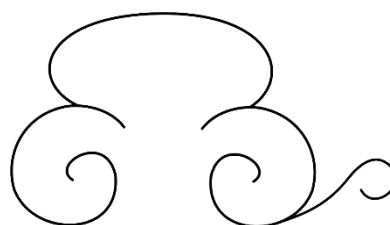


図 15-2 マクロ写真と模式図（メガネ形屈輪文，右下部に下向きの蔓が伸びる）

時代	中国	法量	直径	25.5 cm
	宋一元時代（13-14世紀）		高台径	20.0 cm
員数	1枚		高さ	3.1 cm
附属品	外箱	所蔵者	個人蔵	
<p>総体に屈輪文を彫漆した丸盆。見込みは、中央の丸文から放射状に屈輪文を描く。屈輪文はメガネ形と呼ばれる形状である。鏝裏にも屈輪文を帯状に配す。</p> <p>見込みは、中央にコンパス痕がみられ、複数の柁目板をH字形式に接ぎ合わせている。鏝は巻胎である。各テープ材は一重ごとに継ぎ目がみられ、直径の異なる曲輪を重ねた環状巻胎である。</p>				

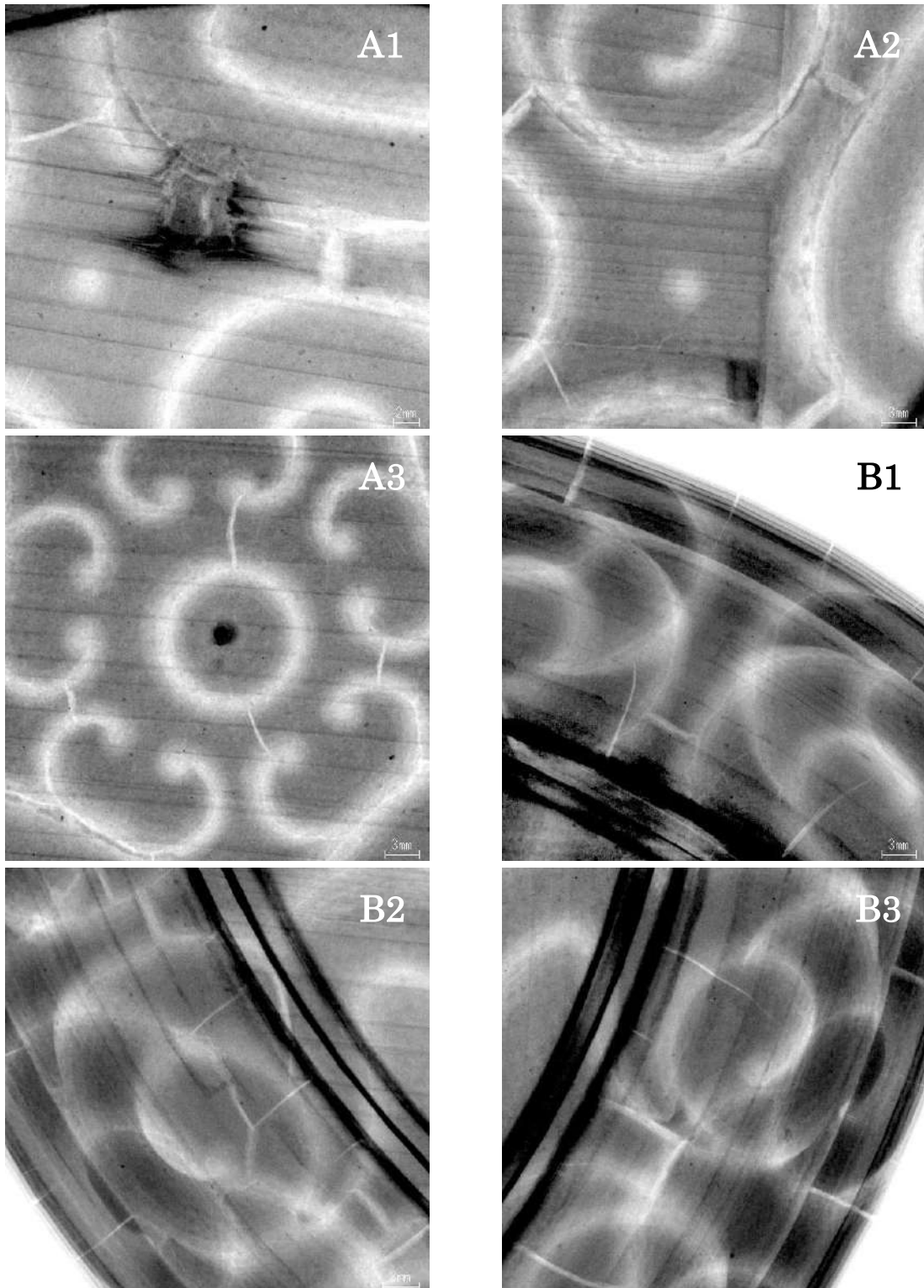


図 15-3 X線透過画像 (A1~3: 見込みの板, 複数材をH字形式に接ぎ合わせている. 一部に節や傷がみられる. B1~3: 鏝縁の巻胎部分. 各輪に継ぎ目がみられる.)



図 16-1 全形



図 16-2 鏝表の二重蔓花唐草

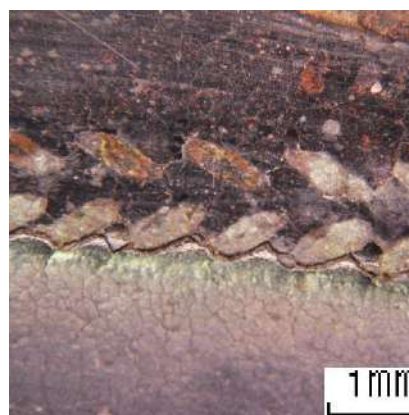


図 16-3 見込みの金属縫線 (実体顕微鏡画像, ×20)

時代	中国 元時代 (14 世紀)	法量	直径 20.8 cm 高さ 2.5 cm
員数	1 枚	所蔵者	愛知県美術館蔵
附属品	外箱 (蓋表に墨書「青貝盆」)		木村定三コレクション M1386

総体黒漆塗りに螺鈿による加飾で八宝文を描いた丸盆。八宝文は八葉蓮華文の花弁内に配す。蓋表および裏には、精緻な毛彫を施した二重蔓花唐草を巡らす。

見込みは中央にコンパス痕がみられる円形の柁目板を用いる。T 字形式に接ぎ合わせた板縁と巻胎の鏝を接合している。

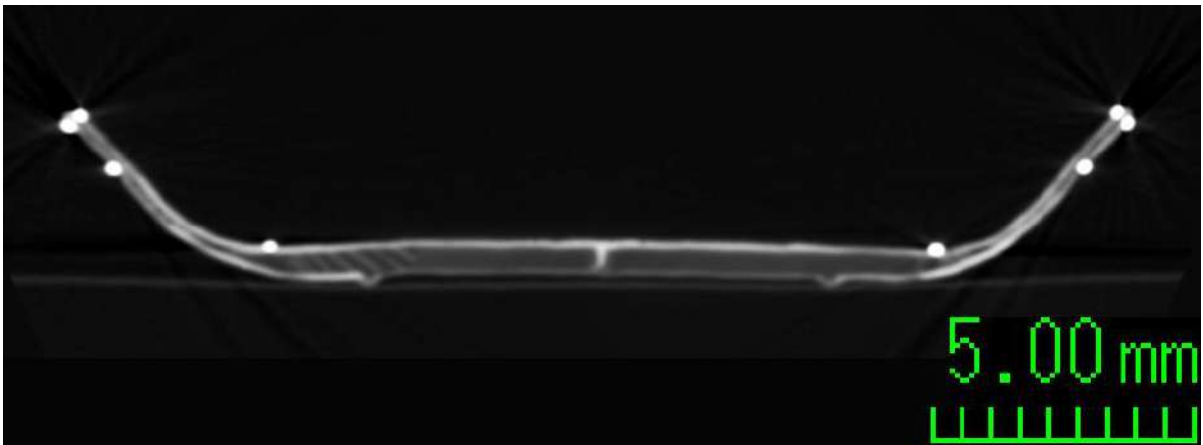
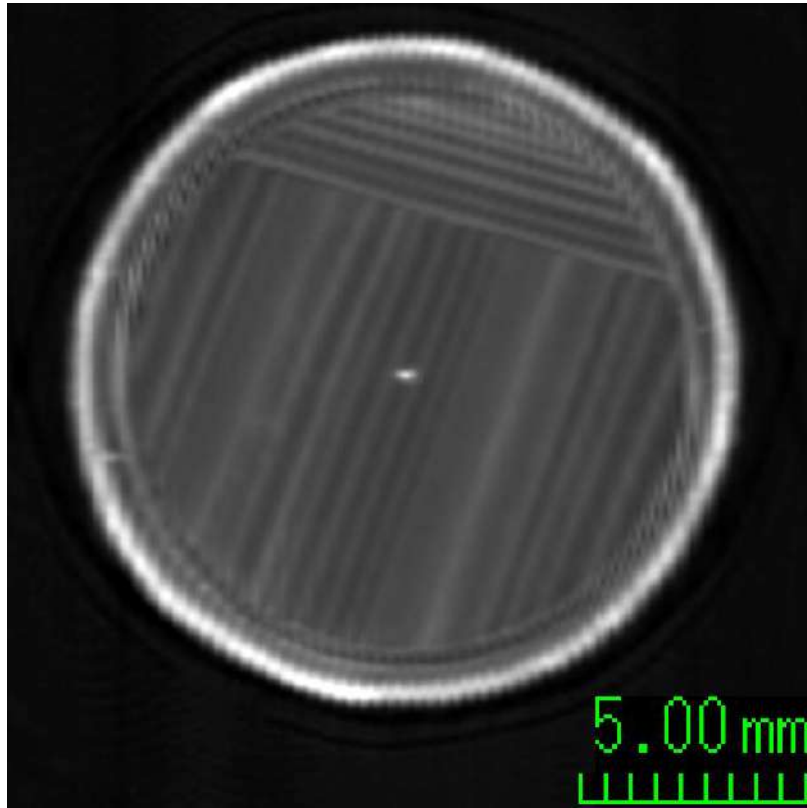


図 16-4 CT 画像（上図：見込みの横断面，下図：側面断層画像）

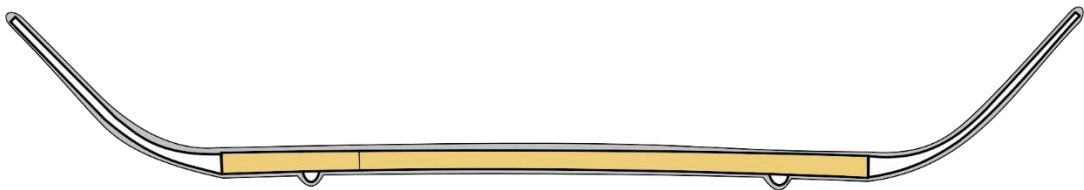


図 16-5 模式図（鏝は木地が薄く、僅かに縁が外側に反る）



図 17-1 全形

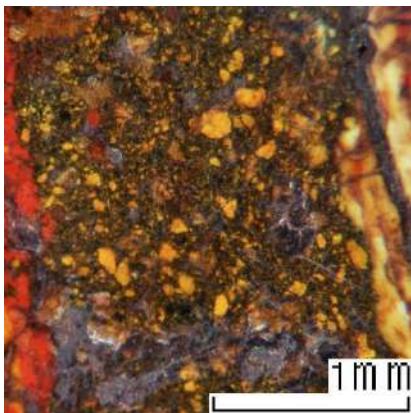


図 17-2 塗膜の実体顕微鏡写真 (×40)

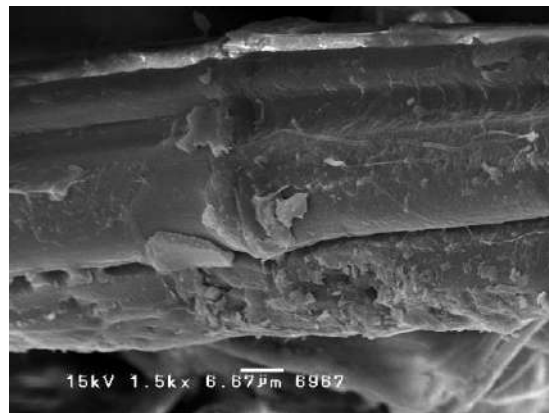


図 17-3 電子顕微鏡写真 (布着せ繊維：麻)

時代	中国 元-明時代 (14-15 世紀)	法量	直径	25.5 cm
			高さ	2.6 cm
員数	1 枚	所蔵者	愛知県美術館蔵	
附属品	外箱 (蓋表に墨書「唐物存生盆」)		木村定三コレクション M1590	

墨流しのような杳目状の文様を施した碁笥底の丸盆。全体は油彩とみられ、各色相が複雑に混ざり合っている。麻を用いた布着せに下地を施し、表面の加飾を施している。

H 字形式に接ぎ合わせた円形の見込みの板に、巻胎の鏝を接合している。元素分析の結果、覆輪は真鍮製である。

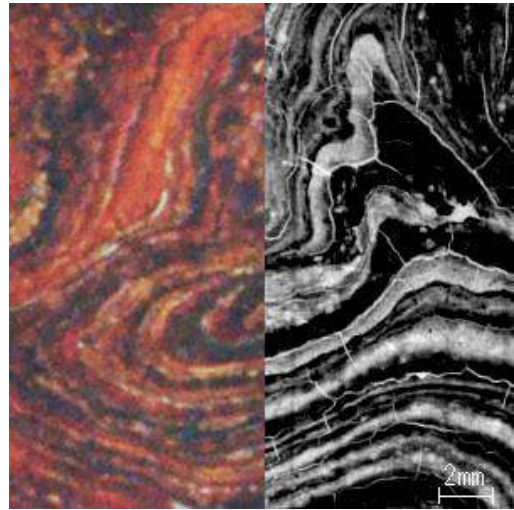


図 17-44 色または5色を用いた油彩とみられる加飾技法. ソフト X 線透過画像から各色相が内部で複雑に混じり合う様子が窺える. (左図: 色調補正画像, 右図: 拡大写真と同箇所のソフト X 線透過画像の比較)

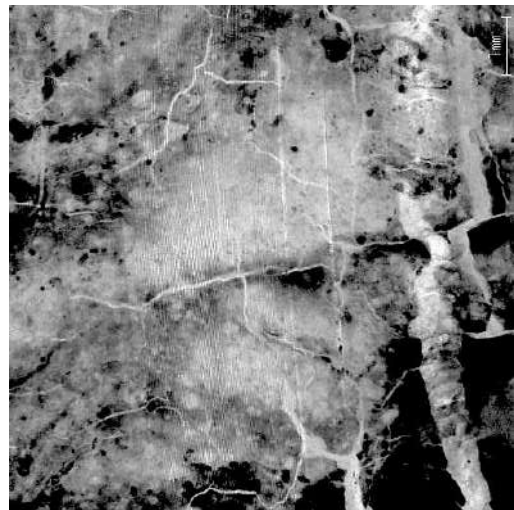


図 17-5 X 線透過画像 (左図: 見込みの接ぎ合わせ箇所, 右図: 巻胎部分の拡大)

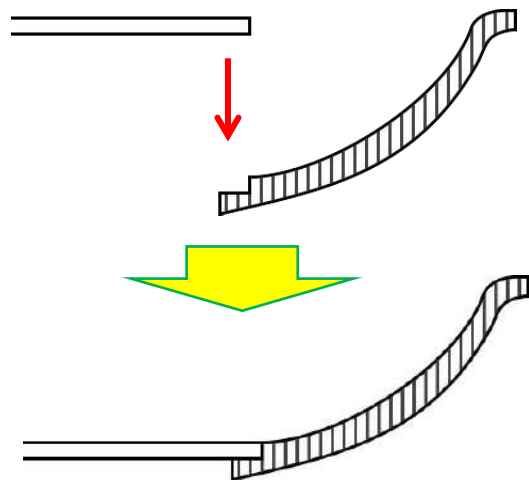
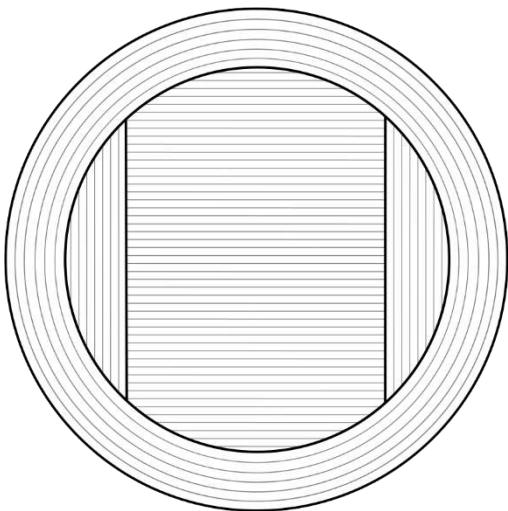


図 17-6 模式図 (左図: 全体の構造, 右図: 見込みの板と罫との接合方法)



図 18-1 全形



図 18-2 彫漆部分



図 18-3 側面

時代	中国 明時代（15-16世紀）	法量	直径	18.2 cm
			高台径	12.2 cm
員数	1枚		高さ	3.4 cm
附属品		所蔵者	個人蔵	

赤褐色の地に牡丹の大輪をあしらった堆黒の丸盆。牡丹図の周囲には枝を巡らし、下部に起点となる太い幹が描かれている。

見込みは、柁目板を T 字形式に接ぎ合わせた円形板であり、大きな節ヤスがみられる。鏝は巻胎で、厚み約 1.0~1.5mm 程度のテープ材を 10 枚以上巻いているとみられる。

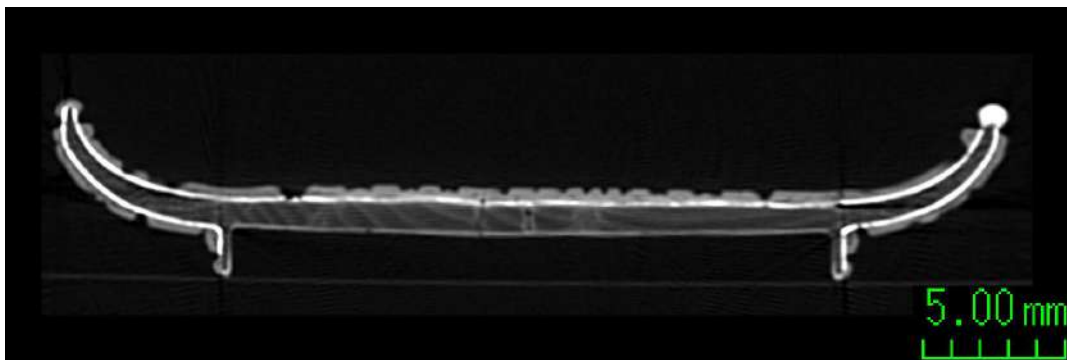
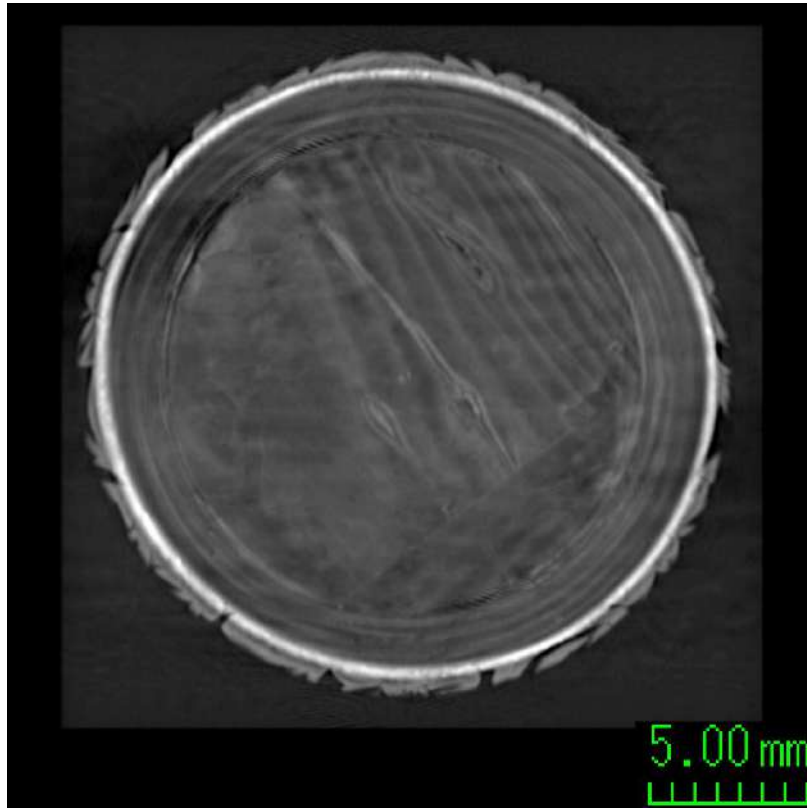


図 18-4 CT 画像（上図：見込みの横断面，下図：側面断層画像）

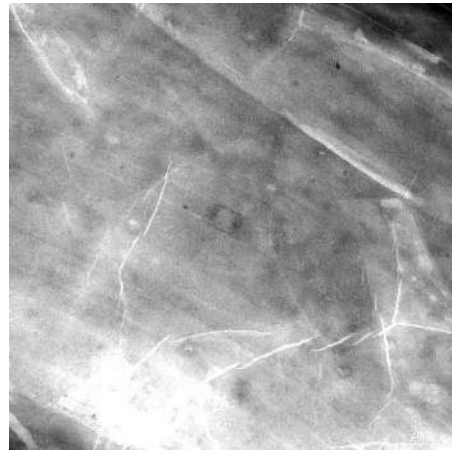


図 18-5 X 線透過画像（左図：見込みから銲縁，右図：テープ材の継ぎ目）



図 19-1 全形



図 19-2 畳付きの環状構造



図 19-3 側面

時代	中国	法量	鍔径	18.4 cm
	北宋時代 (10-11 世紀)		口径	9.9 cm
員数	1 基		底径	9.0 cm
			高さ	8.2 cm
附属品		所蔵者	個人蔵	

総体朱漆塗りの無文の天目台。酸漿は口縁に向かって大きく広がる。鍔は六弁花形であり、縁に幅の広い帯状の構造である。器形は宋代漆器および銀器などにみられる。類似する作例が大英博物館に所蔵されている。鍔はすべてテープ状の木材を渦状に巻き上げた渦状巻胎で成形する。鍔縁の帯は、鍔の巻胎構造を補強すると推測される。同箇所は、さらに覆輪で覆っていた痕跡がみられる。

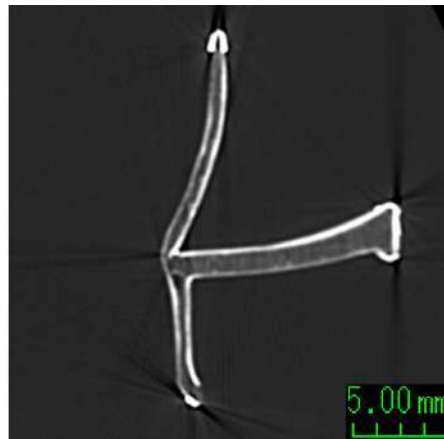
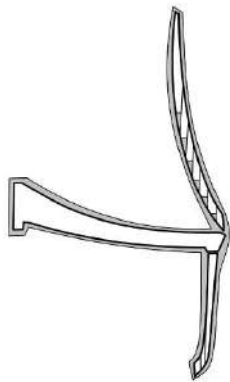
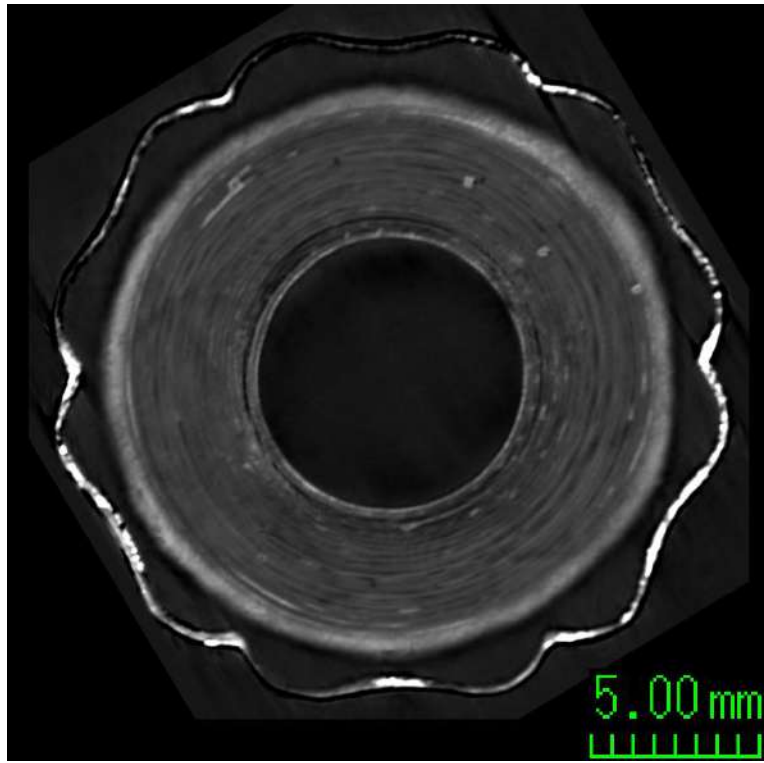


図 19-4 CT 画像（上図：見込みの渦状巻胎構造，下図：模式図と側面断層画像）

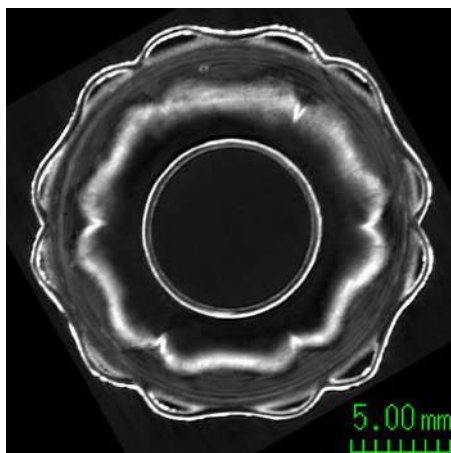


図 19-5 鏢縁の CT 画像
（縁を帯状のテープ材を巻いて巻胎を補強する）

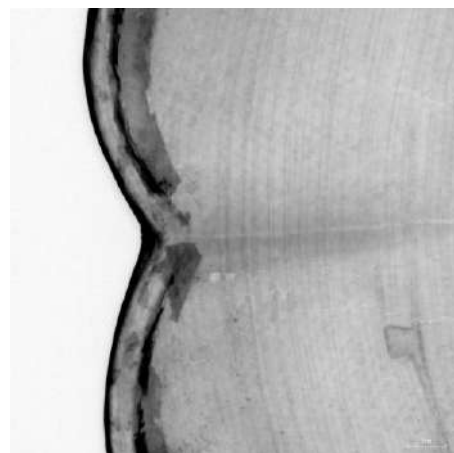


図 19-6 X 線透過撮影（鏢縁のテープ材
は弁花形に折りだめて成形する）



図 20-1 全形

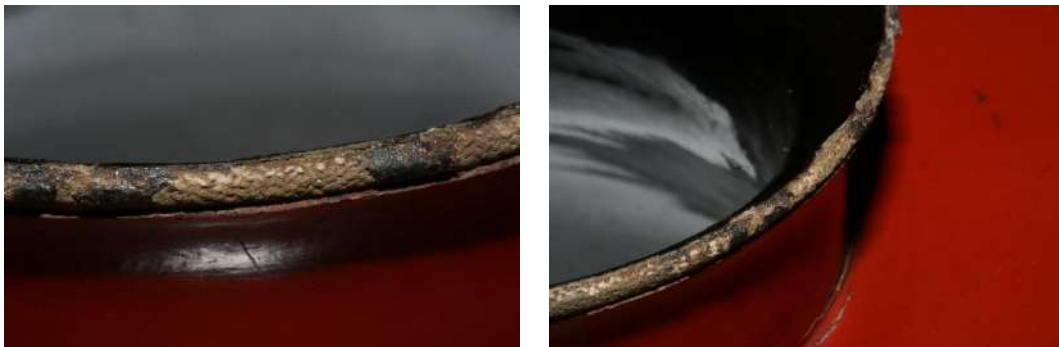


図 20-2 マクロ撮影（畳付きの覆輪欠失箇所から布着せ繊維が露出している）

時代	中国 南宋時代（12-13世紀）	法量	鍔径	16.5 cm
員数	1基		口径	8.9 cm
			底径	7.0 cm
			高さ	6.6 cm
附属品	外箱	所蔵者	個人蔵	
<p>内朱外黒漆の無文の天目台。酸漿は大きく拡がり、口縁付近で内側へ狭窄する。口縁と鍔縁に真鍮製の覆輪を巡らす。畳付きの覆輪は欠失し、同箇所から麻類の布着せ繊維が露出している。酸漿と土居はブロック状の一材から挽き出している。鍔は円環状の板で水平面を成形し、板縁から鍔縁を巻胎で造る。酸漿や鍔、土居の各部位は、布着せや下地を塗布した後に芋付けしている。</p>				

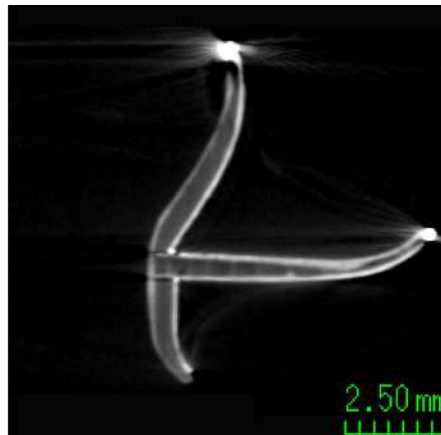
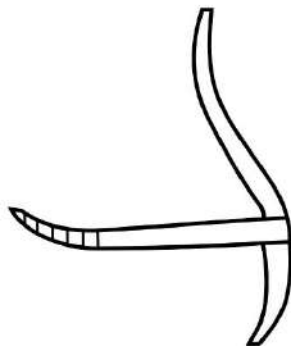
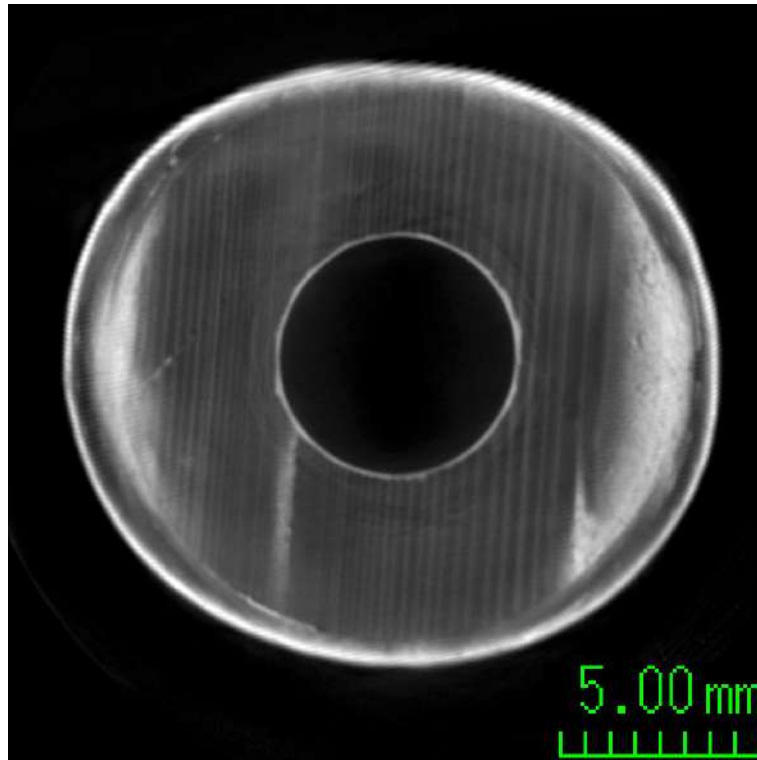


図 20-3 CT 画像（上図：鐳の円環状の板，複数の板材を接ぎ合わせているが枚数は判然としない．下図：模式図と側面断層画像，板縁から鐳縁を巻胎で成形する．）

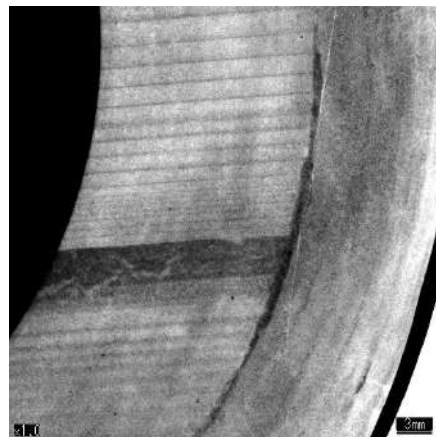
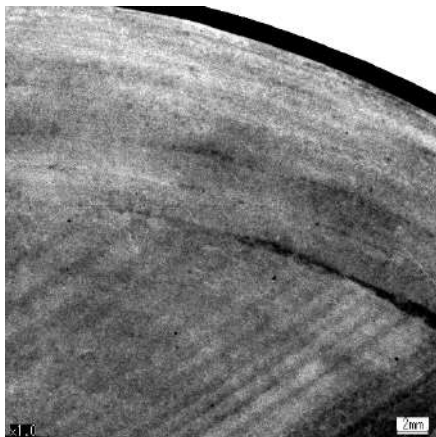


図 20-4 X 線透過画像（円環状の板と巻胎の接合箇所．円環状の板は輪郭が整っておらず，空隙を下地で埋めている）



図 21-1 全形



図 21-2 鏝裏



図 21-3 鏝表（二十四孝図：郭巨）

時代	中国	法量	鏝径	16.7 cm
	元—明時代（14—15世紀）		口径	8.3 cm
員数	1基		底径	7.8 cm
			高さ	6.5 cm
附属品	外箱	所蔵者	個人蔵	
<p>総体黒漆塗りに螺鈿による加飾を施した天目台。中国における説話、二十四孝図を描いている。場面は酸漿と鏝表に各3場面、合計6場面描かれている。鏝裏には多弁花の折枝文を等間隔に5つ配す。元時代の螺鈿加飾にみられる特徴を備えている。</p> <p>鏝を円環状の板と巻胎で成形する。厚さ約2.0mmのテープ材を巻いている。酸漿と土居は挽き物である。各部材は下地を塗布した後に芋付けしている。</p>				

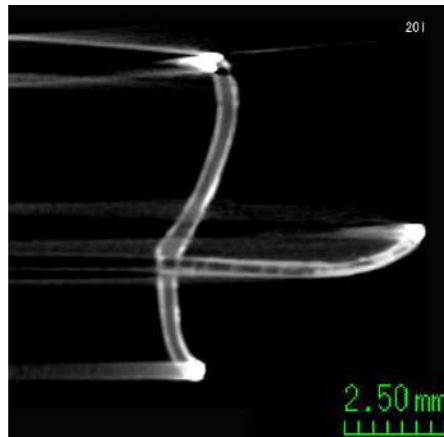
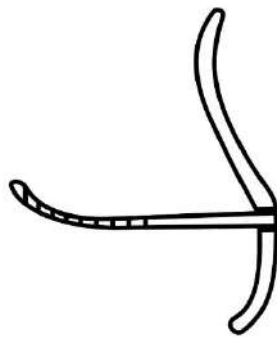
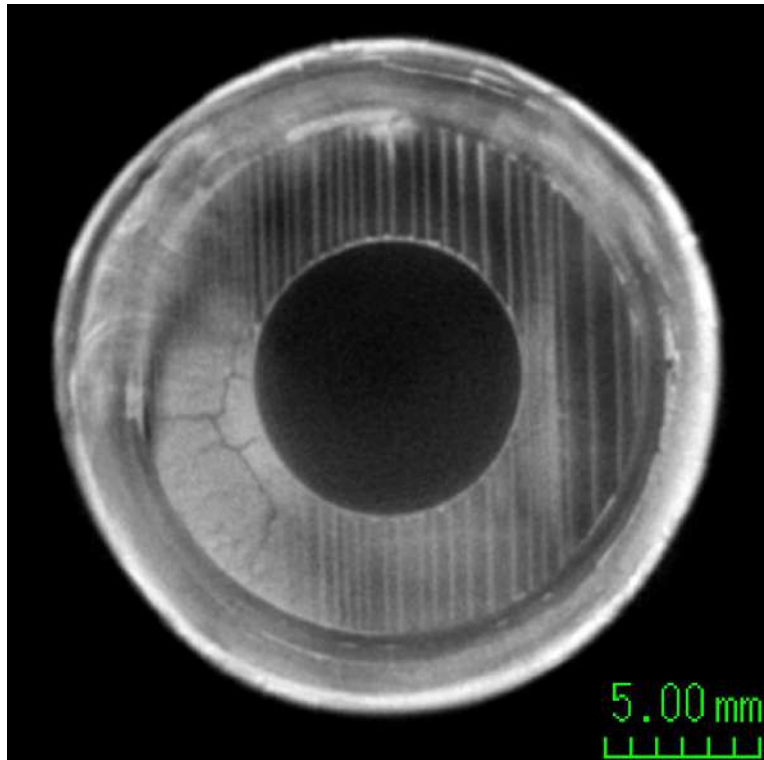


図 21-4 CT 画像（上図：鏝の円環状の板と巻胎構造，板には凹凸がみられ下地材で平滑に成形している．下図：模式図と側面断層画像，鏝縁のみ巻胎で成形する）

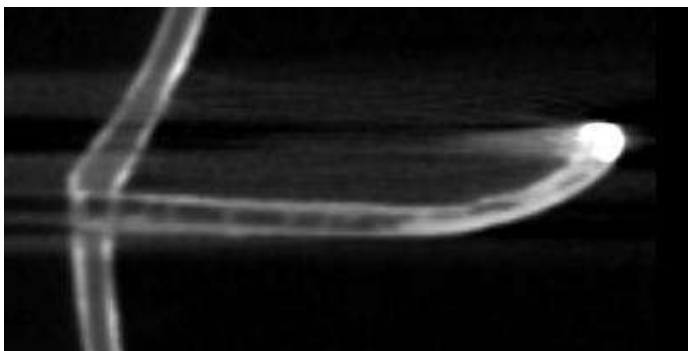


図 21-5 CT 画像（各部材の接合部の拡大画像）

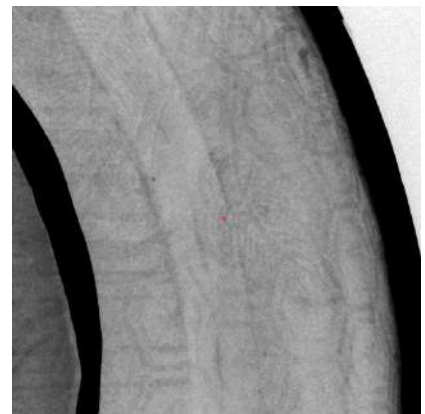


図 21-6 X 線透過画像（鏝縁の巻胎）



図 22-1 全形



図 22-2 側面

時代	中国	法量	鏝径	13.9 cm
	明時代 (15-16世紀)		口径	6.7 cm
員数	1基		底径	6.0 cm
			高さ	6.9 cm
附属品	外箱	所蔵者	個人蔵	
<p>総体に牡丹図を堆黒であらわした天目台。彫漆には朱漆の層を含む。最下層の地色は黄褐色である。口縁、鏝縁、畳付きは玉縁に仕上げる。</p> <p>酸漿と土居は巻胎で成形され、垂直部分を一重の曲輪で成形する。曲輪の接合箇所は樹皮などで縫合している。鏝は縁のみ巻胎で、平滑部を円環状の板であらわす。</p>				

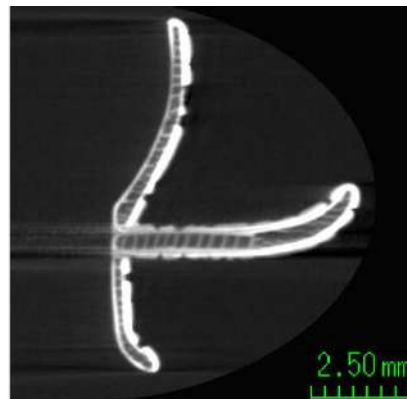
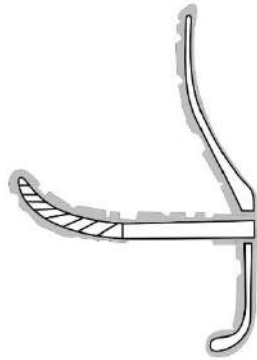
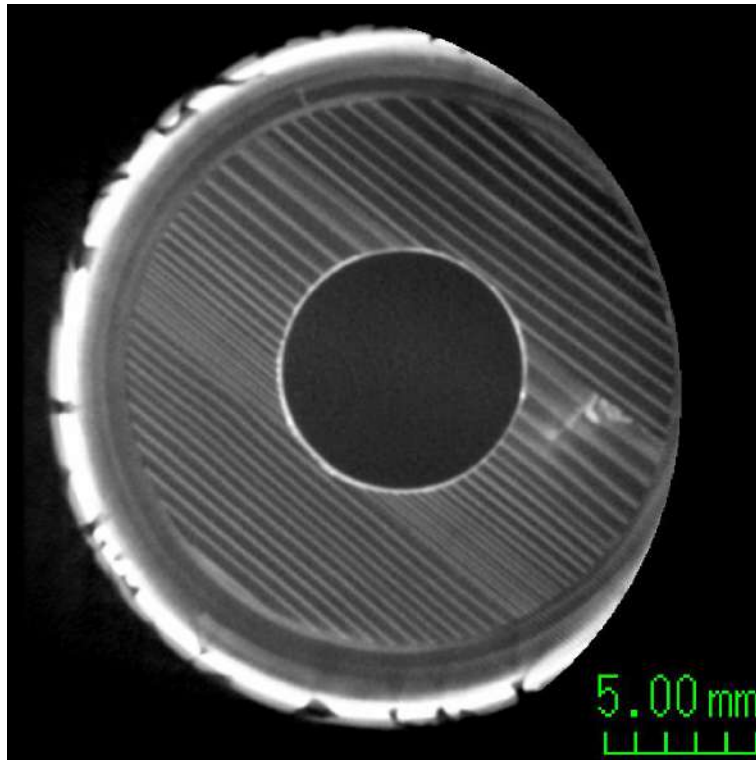


図 22-3 CT 画像（上図：円環状の柁目板は，接ぎ合わせ枚数が未明である．下図：模式図と側面断層画像，曲輪を用いて酸漿と土居の垂直部分を成形している．鏝の平滑部を円環状の板で成形する．各部材は彫漆を施した後に接合している．）

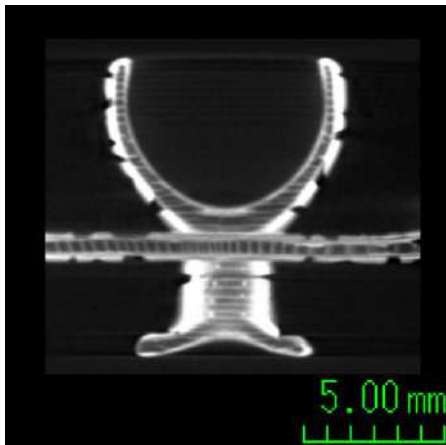


図 22-4 CT 画像（曲輪の縫合箇所）

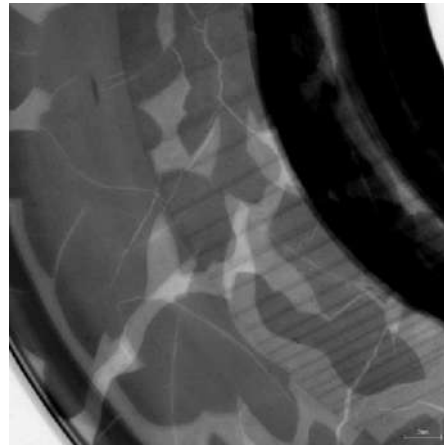


図 22-5 X 線透過画像（円環状板と巻胎の接合部）



図 23-1 全形



図 23-2 口縁の木地露出



図 23-3 金箔にみられる斑紋（鏝裏）

時代	日本	法量	鏝径	16.0 cm
	室町時代（15-16世紀）		口径	8.5 cm
員数	1基		底径	7.5 cm
			高さ	9.9 cm
附属品	外箱	所蔵者	個人蔵	

朱漆塗りに金箔を施した天目台。酸漿は、口縁に向かって緩やかに拡がり、大きく造られている。土居も高く造られ、鏝と垂直に接して畳付きで外へと広がる。金箔部分には、斑紋のような円形状の文様がみられるが、経年の摩耗により判然としない。

酸漿、鏝、土居の各部材は一材から成形されている。白木地の段階で接合し、布着せや下地、上塗りを施す。土居内の板は、CT画像から後補とみられる。



図 23-4 鏝の構造（左図：鏝裏写真，右図：CT 画像．鏝は柾目の一材を削り出した挽物）

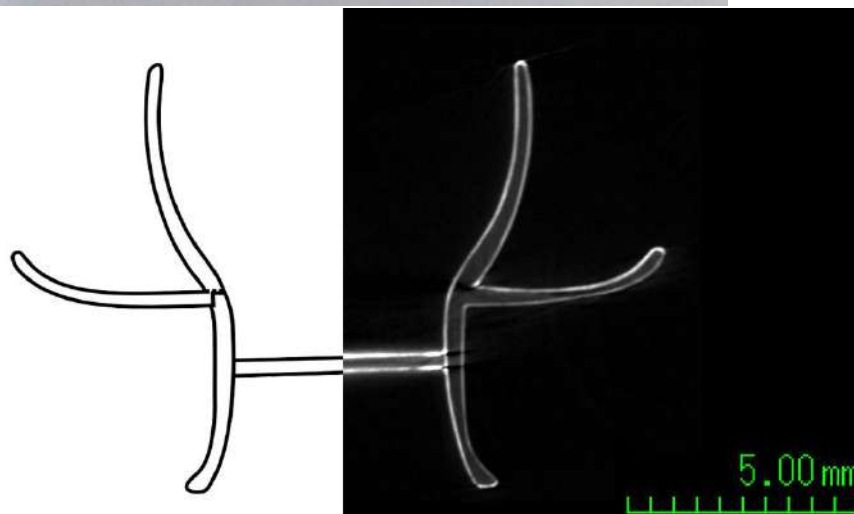


図 23-5 全体の木地構造（上図：側面写真，下図：模式図と CT 側面断層画像．各部件の接合部には漆などの接着剤を用いていない．白木地の段階で各部件を接合している．）



図 24-1 全形



図 24-2 黄天目の底部にしるされた「壽」銘



図 24-3 天目附属の付け札と落ち札

時代	日本	法量	鍔径	15.8 cm
	江戸時代 (17世紀)		口径	7.3 cm
員数	1基	所蔵者	底径	7.6 cm
附属品	津軽家伝来 黄天目, 付け札 (金箔散らし), 落ち札, 外箱		高さ	6.4 cm
		所蔵者	個人蔵	

総体黒漆塗り無文の天目台。口縁、鍔縁、暈付きに金銅製とみられる覆輪を巡らす。酸漿が広く拡がり、口縁付近で大きく狭窄する。津軽家伝来とされる黄天目、大正6年11月に開かれた東京美術倶楽部において入札されたと記された落ち札が附属する。

すべて柾目材から成形している。白木地の状態で木目を揃えて接合している。木地が極めて薄く、細かく目の詰まった木材を用いている。

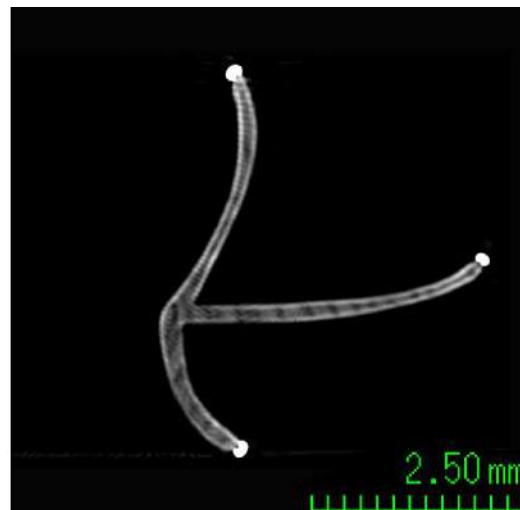
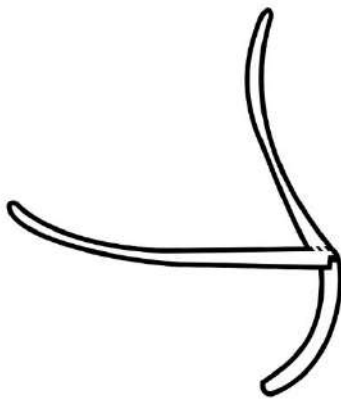
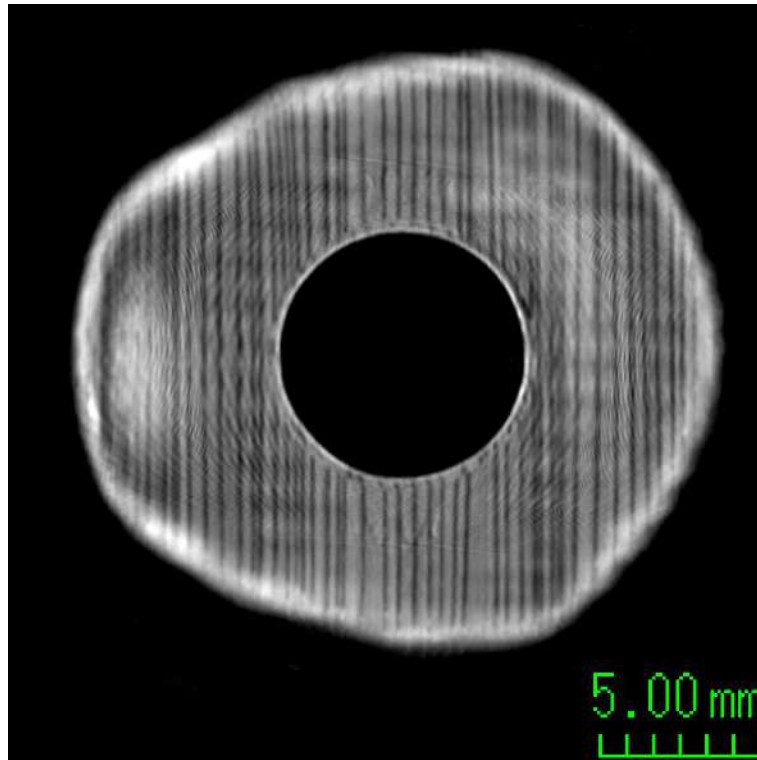


図 24-4 CT 画像（上図：鏝の円環状の柁目板，下図：模式図と側面断層画像．表裏共に平滑に整い，白木地の状態で木目を揃えて接合している）

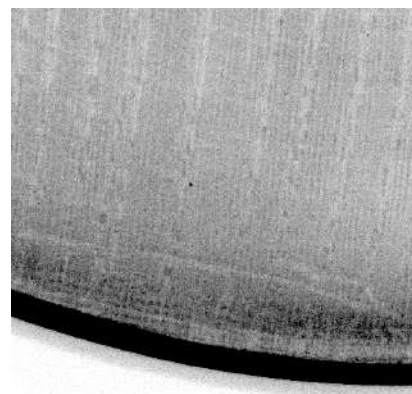
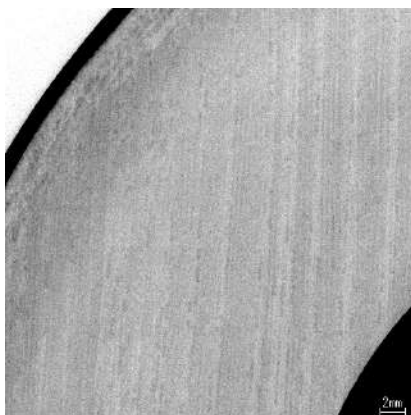


図 24-5 X 線透過画像（鏝縁まで木目が通り、目が細かい針葉樹を用いる）

25 朱漆六弁花形天目台 B

本論 pp. 110-111



図 25-1 全形



図 25-2 鏝表



図 25-3 側面

時 代	日本	法 量	鏝径	16.0 cm
	江戸時代 (17世紀)		口径	8.5 cm
員 数	1基		底径	9.2 cm
			高さ	7.3 cm
附 属 品	外箱	所蔵者	個人蔵	
<p>根来塗りであらわした六弁花形天目台。土居内および畳付きのみ黒漆を塗布している。中塗りの黒漆が手擦れにより口縁や鏝縁にあらわれている。</p> <p>酸漿、鏝、土居の各部位は一材から成形されている。白木地の段階で接合し、布着せや下地、上塗りを施す。土居上部を凸状に成形し、鏝内側と接合する。</p>				

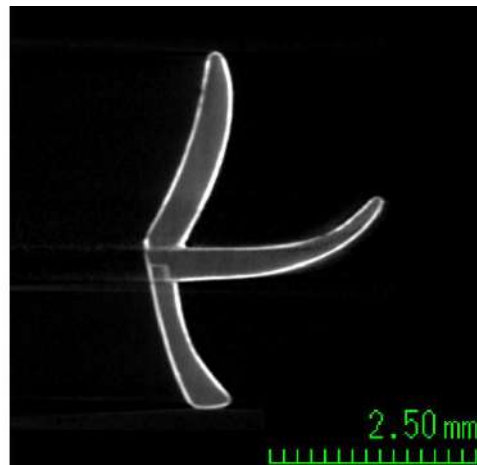
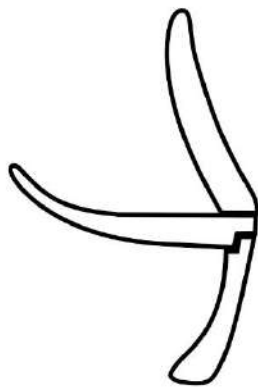
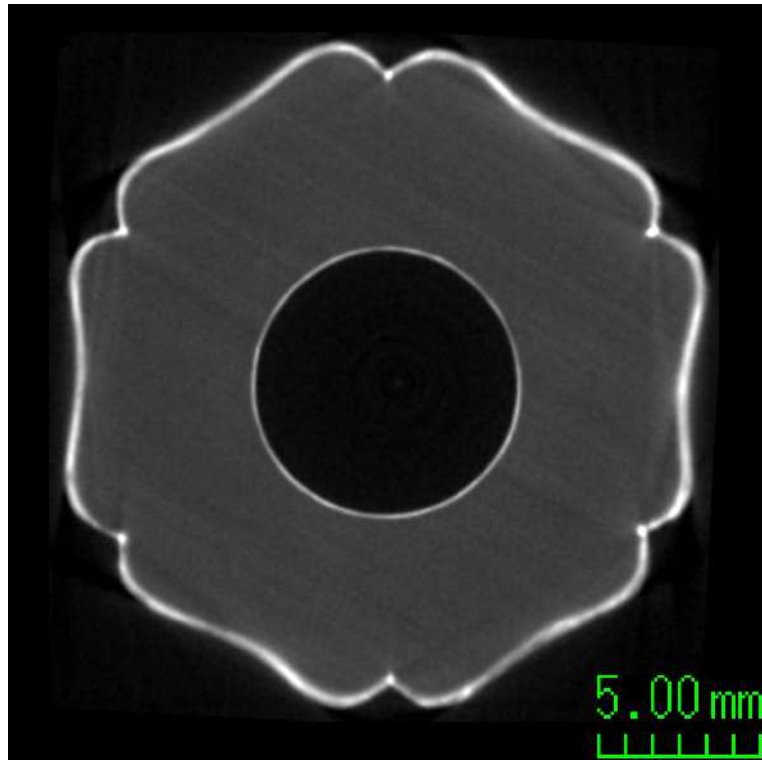


図 25-4 CT 画像（上図：鏝の円環状の柁目板．下図：模式図と側面断層画像，土居上部を凸状に成形して鏝と接合する．接合には糊漆など接着剤を使用しているとみられる）

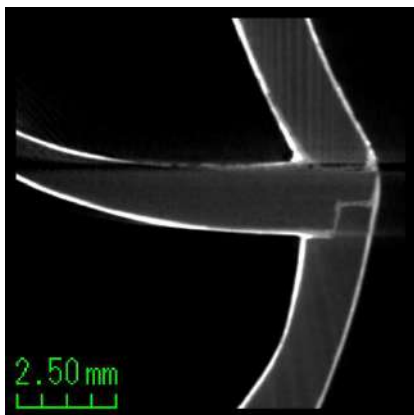


図 25-5 CT 画像（各部材の接合部の拡大）

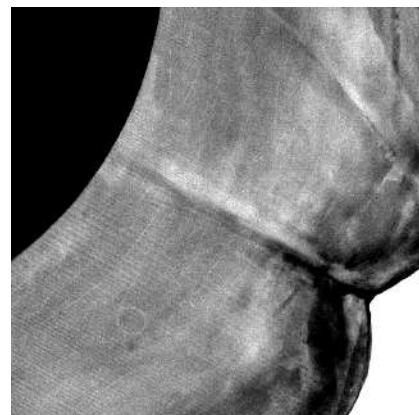


図 25-6 X 線透過画像（鏝縁）



図 26-1 全形



図 26-2 土居内の朱漆銘「西」



図 26-3 側面

時 代	日本	法 量	鍔径	16.7 cm
	江戸時代 (17-18 世紀)		口径	8.0 cm
員 数	1 基		底径	7.2 cm
			高さ	5.2 cm
附 属 品	外箱	所蔵者	個人蔵	

総体黒漆塗りに無文の天目台。酸漿は大きく広がり、口縁付近で内側に狭窄する。高台内に朱漆銘「西」がしるされている。口縁、鍔縁、畳付きに真鍮製の覆輪を巡らす。

酸漿、鍔、土居は一材から削り出した挽物であり、鍔は板目である。各部材は、白木地の段階で接合している。鍔は上部の内円部分を凸状に成形し、酸漿内に接合している。

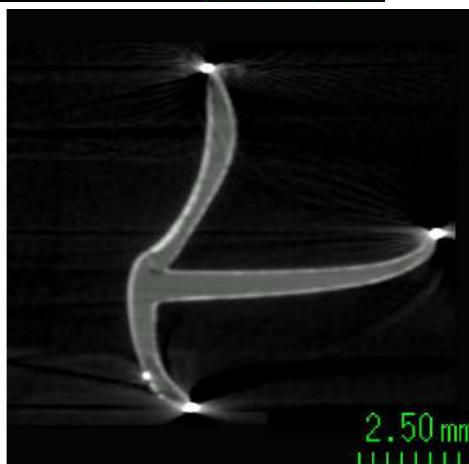
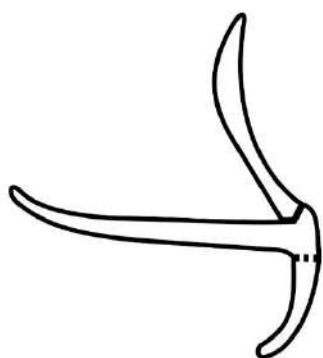
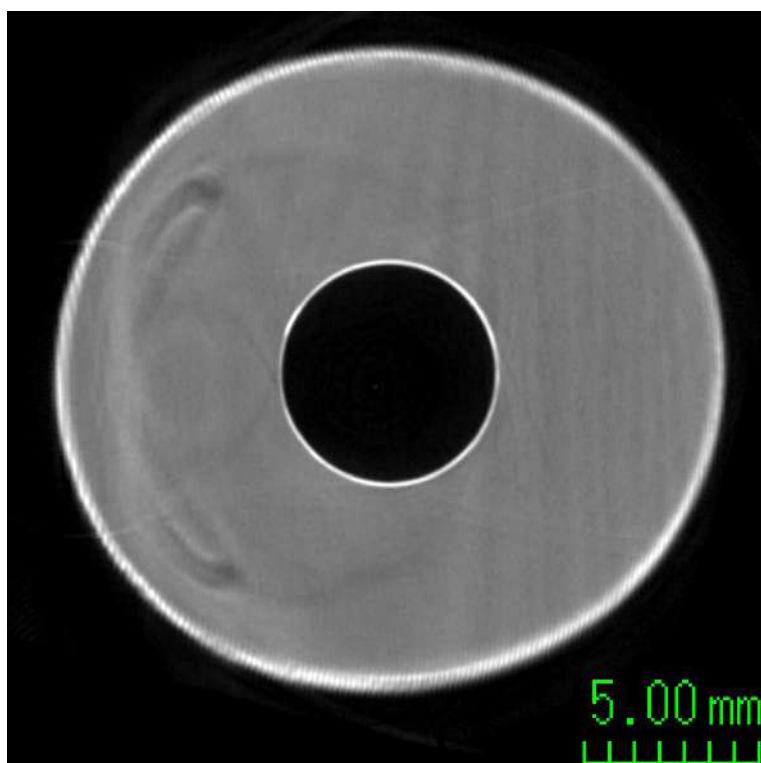


図 26-4 CT 画像（上図：鏝の横断面，円環状の板目材，下図：模式図と側面断層画像，鏝上面の内円部分を凸状に成形し，酸漿内部と接合する）

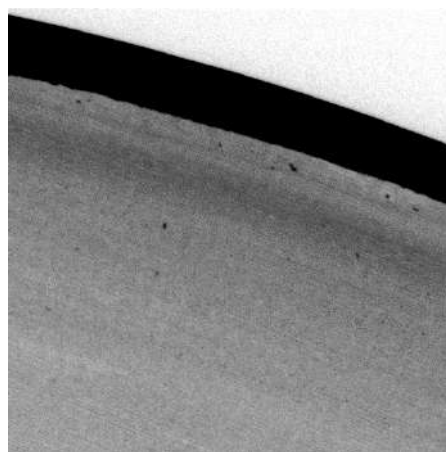
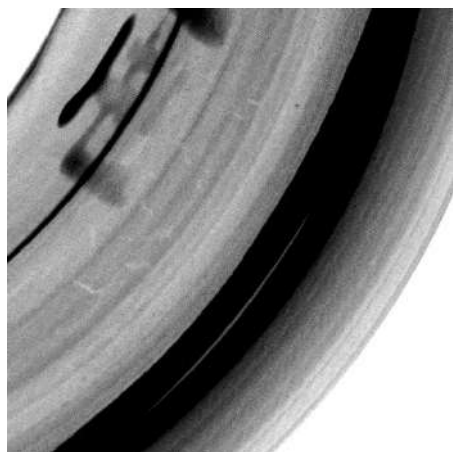


図 26-5 X 線透過画像（左図：畳付き「西」銘付近，右図：鏝縁）



図 27-1 全形



図 27-2 瀬戸白天目



図 27-3 側面

時代	日本 江戸時代（17-18世紀）	法量	鍔径	16.6 cm
員数	1基		口径	7.2 cm
附属品	瀬戸白天目，外箱（「唐物天目之 臺／時習軒」「宗意（花押）」）	底径	7.5 cm	
		高さ	6.4 cm	
		所蔵者	個人蔵	

総体黒漆塗りに無文の天目台。酸漿は口縁付近で狭窄し、丸みを帯びている。口縁、鍔縁、畳付きに真鍮製とみられる覆輪が巡る。

酸漿、鍔、土居は一材から削り出した挽物であり、鍔は目の細かい柾目を用いる。各部材は白木地の段階で木目方向を揃えて接合する。鍔表を凸状に成形し、酸漿と接合する。

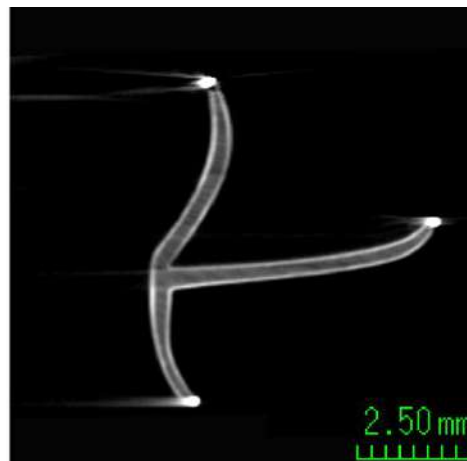
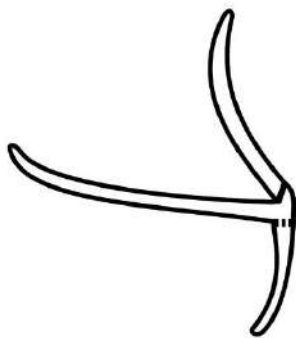
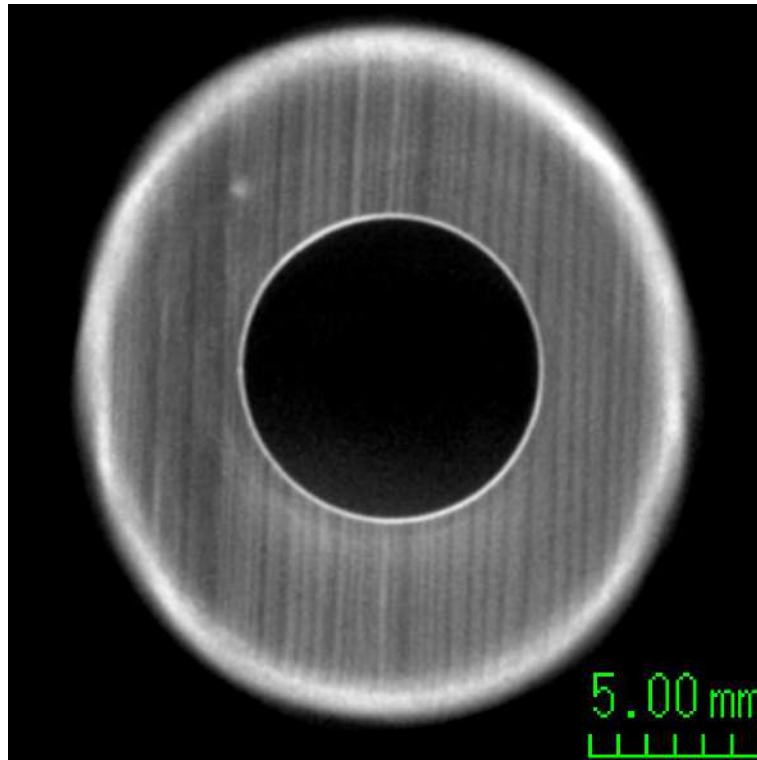


図 27-4 CT 画像（上図：鏝の横断面，円環状の柁目板を用いる．下図：模式図と側面断層画像．鏝表の内周部分を凸状に成形し，酸漿内と接合する．）

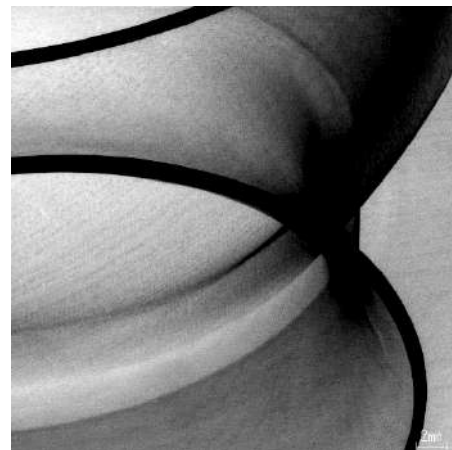


図 27-5 X 線透過画像（左図：鏝縁．右図：各部材の接合箇所，上方は酸漿）



図 28-1 全形



図 28-2 蓋甲

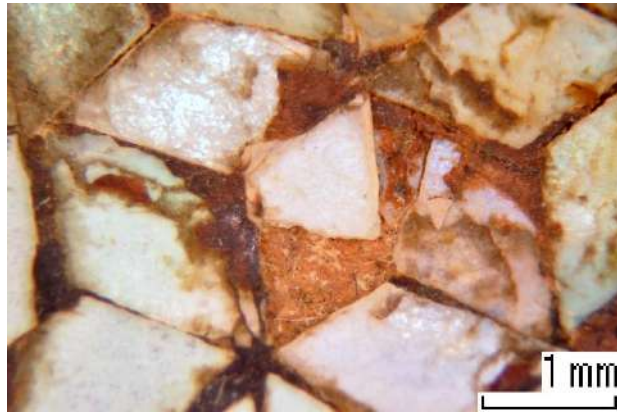


図 28-3 実体顕微鏡写真（蓋表の貝剥離箇所，×30）

時代	中国	法量	直径	7.1 cm
	明—清時代（16—17世紀）		高さ	4.0 cm
員数	1合	所蔵者	愛知県美術館蔵	
附属品	外箱（蓋表「市女笠／守一（花押）」）		木村定三コレクション M1505	

総体黒漆塗りに螺鈿による加飾が施された香合。高く立ち上がった蓋甲の中央から、縷線を捻花形に配す。椿の折枝文と麻葉文風の貝で華やかに加飾されている。

蓋はすべて紙胎で成形している。身では、柁目の円形板を見込みに用い、胴部分を紙胎で成形する。身の成形方法は、予め見込み板を紙胎部分と接合して成形する方法と、紙胎部分を成形後に板を嵌め込む方法の二つが考えられる。

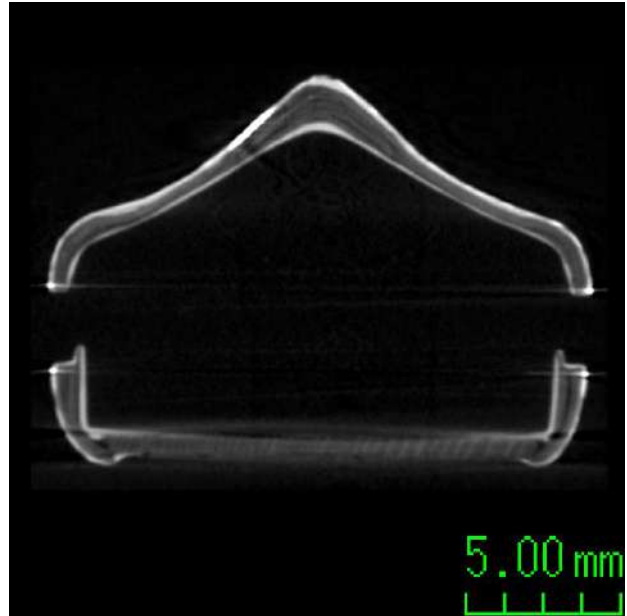
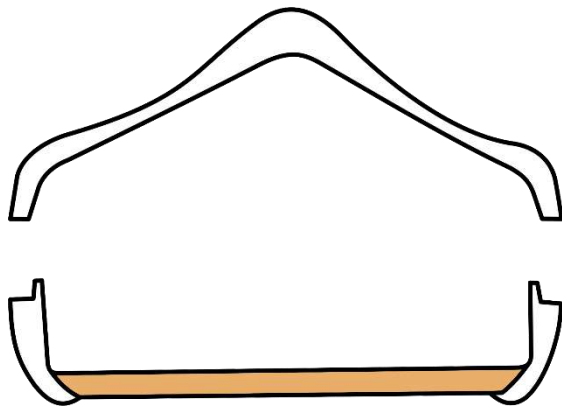


図 28-4 模式図と CT 画像（左図：模式図，茶色部分は木胎．右図：側面断層画像，蓋はすべて紙胎で成形されている．見込みのみ円形の柁目材を使用している．柔軟な紙胎では，強度面から平滑面の成形が困難であったと推測される．また板を使用し，平滑面の成形を簡略化する目的があったとみられる．）

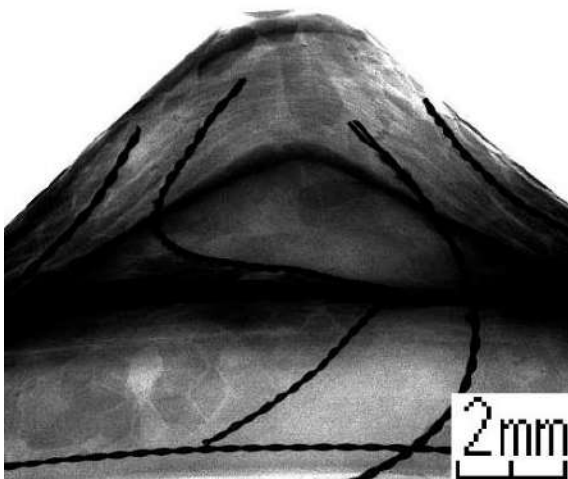


図 28-5 X 線透過画像（蓋甲の頂点，1.0mm に 8 枚から 10 枚程度の紙を重ねているとみられる．）

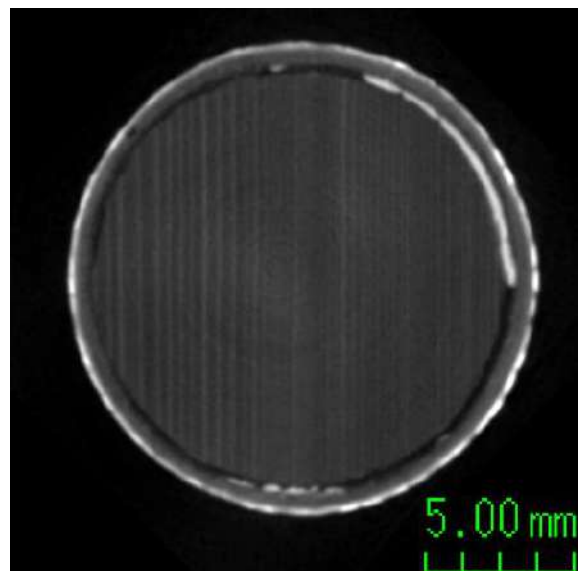


図 28-6 CT 画像（見込みは柁目板で成形する，見込みの周縁部分の一部に漆接着とみられる白色の影があらわれている．）



図 29-1 全形



図 29-2 底面



図 29-3 鏝縁の紙胎剥離

時代	中国	法量	直径	12.5 cm
	明—清時代 (16—17 世紀)		高さ	2.2 cm
員数	5 枚	所蔵者	個人蔵	
附属品	外箱			
<p>総体黒漆塗り無文の盆。鏝縁を五稜花形に成形し、見込みに円形の界線を設ける。現在形状の等しい5枚一組が伝来し、うち1枚で紙胎の素地が露出している。</p> <p>見込みのみ円形木胎を用い、鏝はすべて紙胎である。1.0mm あたり8枚ないし10枚を貼り合わせているとみられる。鏝の紙胎で円形板の周縁を挟み、接合している。</p>				

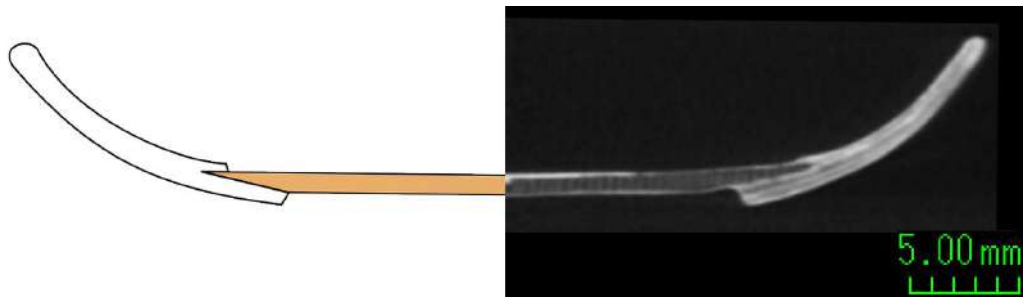
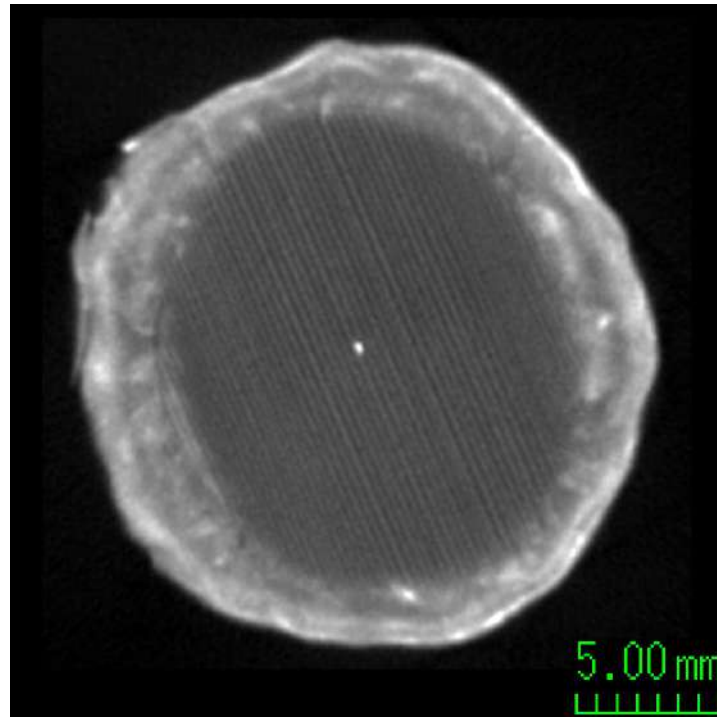


図 29-4 CT 画像（上図：見込みの横断面，中央にコンパスの痕跡がある．下図：模式図と側面断層画像，見込みの板を鏝の紙胎で挟む様に接合している．円形板の周縁は尖鋭に削る）

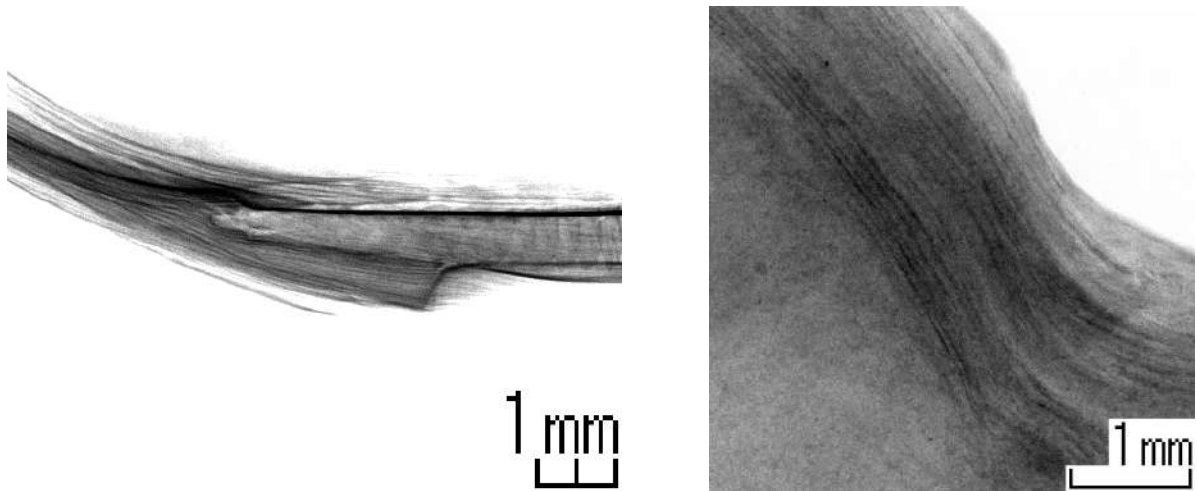


図 29-5 X 線透過画像（左図：紙胎と見込みの板の接合箇所，紙胎の層状構造内に見込み板の縁が接合している．右図：鏝縁，1.0mm あたり 8 枚ないし 10 枚張り重ねている．）



図 30-1 全形

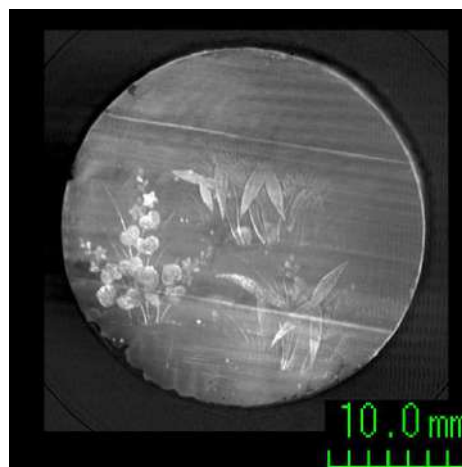


図 30-2 蓋甲（左図：写真，右図：CT 横断面画像，3 枚の板を接ぎ合わせている）

時代	日本	法量	口径	28.1 cm
	桃山時代（16 世紀）		高台径	20.0 cm
員数	1 合		高さ	24.2 cm
附属品		所蔵者	個人蔵	
<p>黒漆地に金平蒔絵と絵梨子地で加飾した蒔絵食籠。高台寺蒔絵様式を備えた食籠である。器形は、唐物漆器の影響を受けたとみられる。</p> <p>3 枚の板を接ぎ合わせた甲板と底板を側板の輪の内側に接合している。側板は、1 枚ないし 2 枚の曲輪を挽曲げて成形している。</p>				

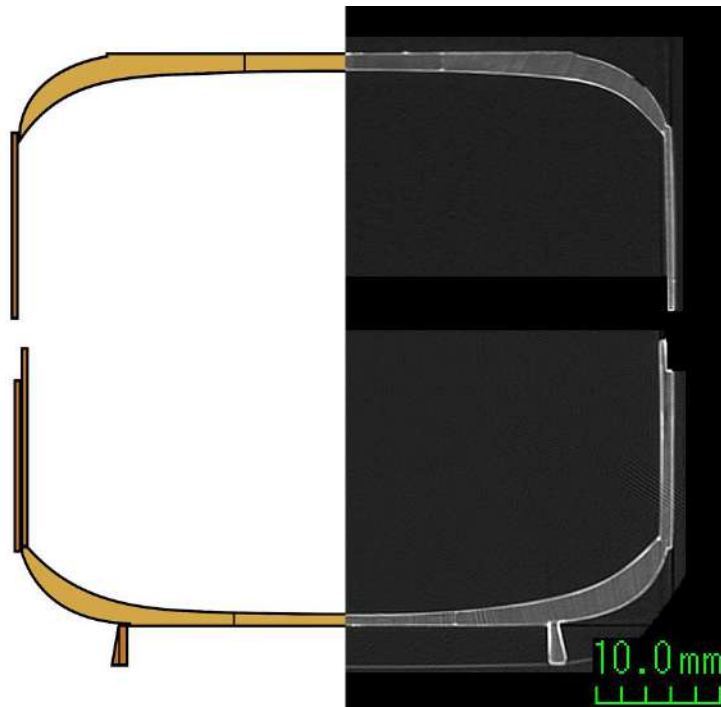


図 30-3 模式図と CT 画像（身と蓋の全体の構造）



図 30-4 底部（左図：写真，右図：CT 画像，中央にコンパス痕がある）

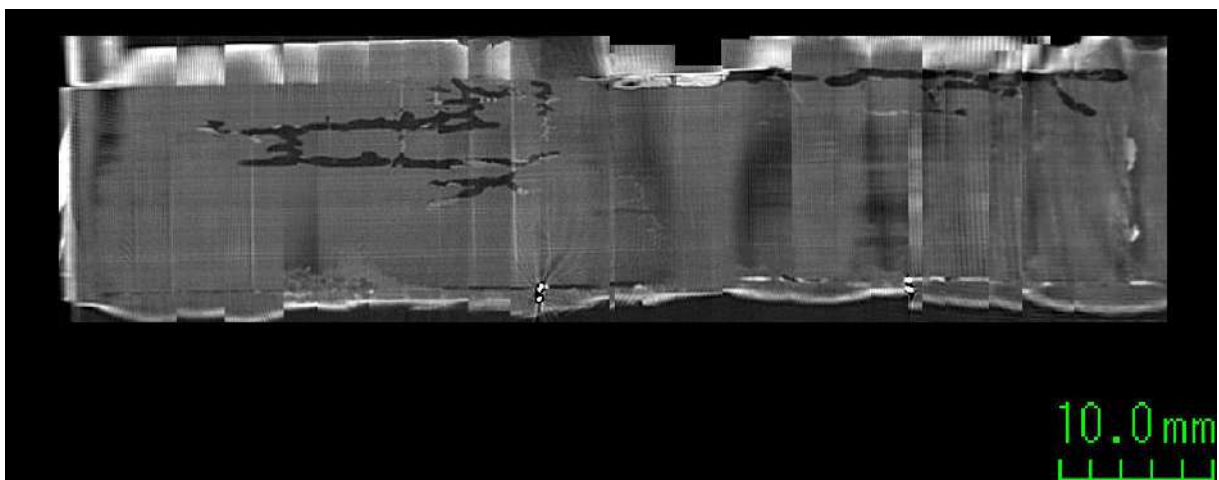


図 30-5 虫損による被害状況（合口の塗膜欠失部から侵入し，木胎部分を中心に進行した）



図 31-1 全形



図 31-2 正面

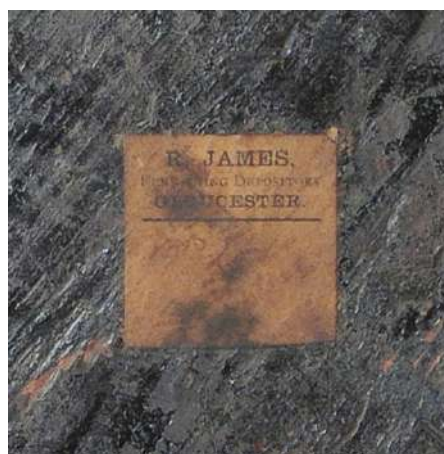


図 31-3 底部の貼り札

時代	日本 桃山－江戸時代（17世紀）	法量	縦	24.6 cm
			横	25.4 cm
員数	1基		高さ	24.4 cm
附属品		所蔵者	個人蔵	
<p>黒漆地に蒔絵と螺鈿による加飾で花鳥図を描いた立方体の箆筒。扉を前方に倒して机として用いる輸出漆器である。各辺に飾りの框や隅金具を設ける。底部にイギリスにある家具販売店の貼り札が貼られている。柾目や板目の板材を各面に使用し、木釘と金釘を併用して接合している。</p>				

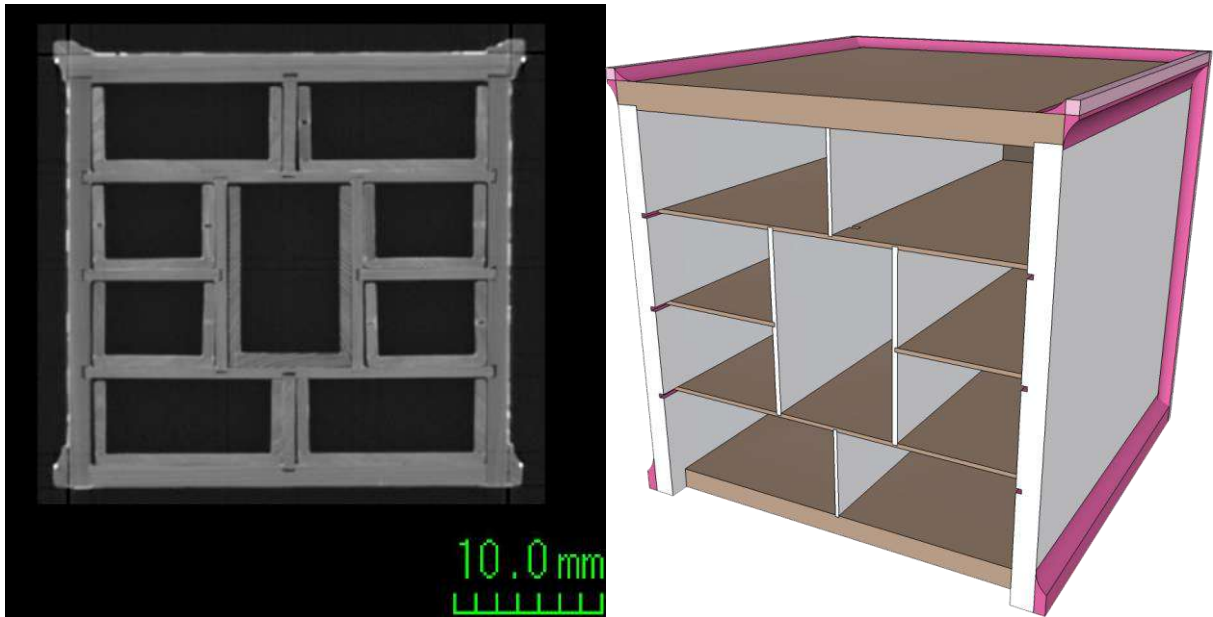


図 31-4 CT 画像（左図：正面図，右図：3D 模式図．天板は側板との接合箇所に浅い溝を設けている．木釘や金釘は板縁に打ち込まれ、飾りの枠で釘頭を隠している．3D 模式図では色分けして接合箇所を判読しやすいよう加工している）

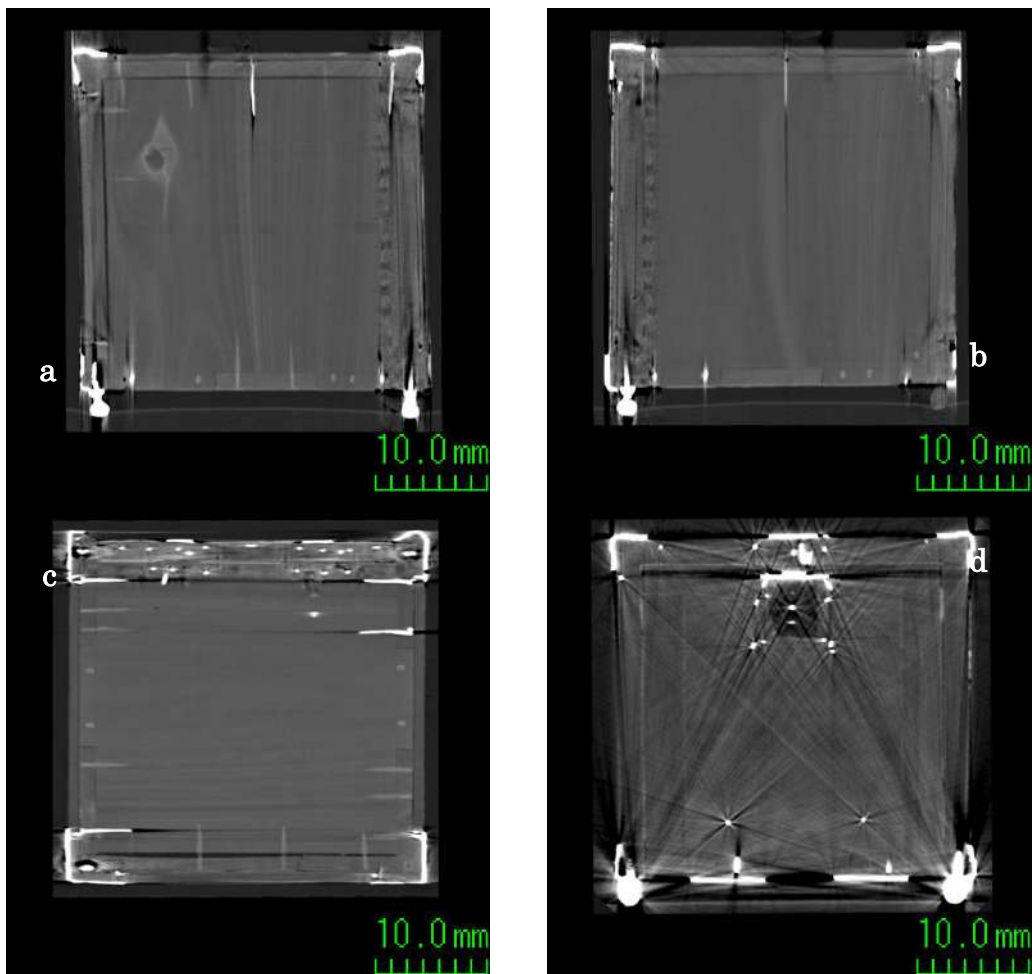


図 31-5 CT 画像（a：正面向かって左側面．b：右側面．c：底板．d：前扉，前扉はH字形に接ぎ合わせた板上部に端喰を入れる）

謝 辞

本研究は指導教員である小池富雄教授の御指導のもとに行われました。小池富雄教授には、博士課程における研究を進めるにあたり多大な御指導と御助言を賜りました。心より深く感謝申し上げます。

本論文の執筆にあたり多くの方々より御指導と御助言を賜りました。文化財用 CT 装置に関しまして、奈良大学の今津節生教授、奈良国立博物館の鳥越俊行氏より御指導と御助言を賜りました。東京国立博物館に導入されている CT 装置につきましては、荒木臣紀氏、ならびに宮田将寛氏より御指導と御助言を賜りました。また、平成 27 年度に参加させていただきました東京国立博物館インターンシップにおきまして、保存修復課の皆様より多大なる御指導を賜りました。心より深謝申し上げます。

文化財における保存分析につきましては、本学名誉教授である永田勝久先生より御指導と御助言を賜りました。漆芸技法に関しましては、小池富雄教授をはじめ、御退職されました加藤寛先生、漆芸文化財修復家の松本達弥氏、京都造形芸術大学の岡田文男教授より御指導と御助言を賜りました。染織に関する基礎的知識と技法につきましては、嵯峨美術大学の佐々木良子先生、本学非常勤講師である原田ロクゴー先生より御指導を賜りました。ここに記して深謝申し上げます。

CT 撮影におきましては、鶴見大学歯学部的小林馨教授より御指導を賜りました。医療用 CT および歯科用 CT 撮影では、同大学附属病院診療放射線技師の大津武士氏に依頼しました。マイクロフォーカス X 線 CT 撮影では、同大学学生支援センター所属、歯学部口腔解剖学講座技師の千葉敏江氏に撮影を依頼しました。また、大津武士氏と千葉敏江氏には、画像解析にあたり様々な御助言も賜りました。ここに記して深謝申し上げます。

調査に際しましては、木村定三コレクションの所蔵館である愛知県美術館の副田一穂氏をはじめ、多数の所蔵者の方々より御協力を賜りました。また、文化財保存修復学会をはじめポスター発表では、参加者の皆様より貴重な御意見や励ましをいただきました。ここに記して謝意を申し上げます。

本論文は、上記の皆様、本大学文学部文化財学科の諸先生より賜りました多大な御指導と御助言により執筆できました。改めて心より深く御礼申し上げます。

そして、ここまで支えてくださいました両親と親族に心より深く感謝申し上げます。執筆に至れましたこと、すべて皆様の支えがあつての賜物にございます。重ねて御礼申し上げます。



Department of Cultural Properties
since 1998